

重要な黙示預言



安息日学校の目標

み言葉の学び

信仰の成長

温かい交わり

本気で伝道



上記の目標をもとに、各教会の必要に合う安息日学校の目標を立ててください。

編集長からのメッセージ

今期は、主要な黙示預言について学びます。これらの預言は神の御言葉に対する私たちの信頼を強め、「キリスト・イエスによる贖^{あがな}いの業」(ロマ3:24)について教え、将来に対する確信と希望を与えてくれます。それはすべて、キリストが過去において私たちのために成し遂げてくださった御業のゆえです。

黙示預言の目的はイエスを啓示することにあります。イエスが過去にしてくださいましたこと、現在しておられること、そして将来してくださることを理解するとき初めて、黙示預言は本来の目的にかなって私たち個人のものとなります。

クリフォード・ゴールドスタイン
(安息日学校聖書研究ガイド編集長)



序 言

(重要な黙示預言)

フランシスコ・モレノは次のように記しています。「人間は恐れています。恐怖は人間行動の背後にある基本的な動機の一つです。人類歴史の大部分は恐怖を否定し、抑え、恐怖から逃れようとする努力の歴史です(『信仰と理性の間』1ページ)。

人間にはいつも何らかの不安があり、将来を知ることができないために不安や恐れがあります。何かのきっかけで富や幸福が舞い込んでくともありますが、病気や飢饉^{きん}、戦争がひそんでいるかもしれません。たとえそれらを避けることができたとしても、人間最大の敵である死はつねに私たちを待ち構えています。

幸いなことに、私たちは私を愛してくださる神、私たちの悩みを知り、大争闘がもたらす恐怖感を和らげてくださる神がおられます。その方法の一つが黙示、すなわち預言です。神は象徴に満ちた夢や幻を通して預言者に語ることによって、私たちが墮落と滅びに満ちた世の災いと騒乱を免れる道を備えてくださいました。この世のあらゆるものが混沌と罪悪とに侵食されている中にあっても、これらの預言から大事なメッセージを読み取り、解釈することができます。それは『恐れてはならない、神が支配しておられる、神の計画が最後には勝利する』というメッセージです。神の最大の約束は、信仰によって最後まで耐え忍ぶ人たちが新しい、罪のない世界において永遠に生きるという約束です。

神は黙示を通して、たとえ人間の心が悪に満ち、利己的で巧妙であろうとも、また人間の考えと計画がいかに浅薄であろうとも、神は変わることなく世界を支配し、罪の世を終わらせるためにすべての出来事を決定しておられることを教えてください。人間の意思と責任が無になることはありませんが、黙示は神の計画が実現することを明らかにしています。世界は騒然として混乱し、不安定に見えようとも……です。神はこれらの預

言を通して、「目に見える世界と目に見えない世界とをさえぎっていたヴェール」(『教育』356ページ)を取り除き、私たちに見させてくださるのです。

聖書の“黙示”は、天上において悪の勢力と戦い、また地上における3年半の奉仕の生涯を送り、最後に十字架上の犠牲となったイエスを啓示しています。主はご生涯の各場面において御自身の敵であり、また私たちの敵である悪を打ち破りました。大争闘が終結しようとする今、イエスは再び悪を打ち破り、この地球が神の王国の平和に回復される道を備えられるのです。

これが聖書“黙示”のメッセージです。このメッセージを読み、信じ、信頼してください。なぜなら、神はこの黙示を通して、罪深く、滅びつつある世界を支配している恐怖を取り除く確かな道を私たちに示してくださるからです。

アンヘル・M・ロドリゲス(世界総会聖書研究所副所長)

今期の聖書研究にあたって、次の点をいつも心に留めましょう。

(1) 聖書が私どもアドベンチストの教科書であり、この「聖書研究ガイド」は参考書です。神の言葉を中心において研究しましょう。

(2) ダニエル書、黙示録はそれぞれの時代背景の中で書かれました。当時の信仰者たちはこれらの預言の言葉によって信仰の励ましを受けたはずですが、21世紀に生きる私どもはこれらの預言にどのような信仰の教訓を見いだすでしょうか。私どもの生き方を助ける霊的な教えを読み取りたいと思います。

(3) キリストとサタン、善と悪との間の“各時代の争闘”、そして神による最後の勝利という結末がメイン・テーマです。この大筋を大事にし、救い主イエス・キリストを中心において福音的に、毎週、毎日の研究を進めましょう。

(4) 研究の中でカトリック教会や地上の国家、権力、制度、組織が出てきますが、それらについての発言、コメントには注意しましょう。「他

教派、とくにローマ・カトリックとの間に不必要な偏見や障壁をつくってはならない。厳しい批判や攻撃をして、彼らに“アドベンチストこそわれらの敵”と思わせてはならない」(『伝道』574ページ)とエレン・ホワイトは1887年に述べています。

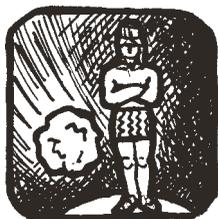
これらの預言の研究が日本伝道に貢献し、私どもの信仰の祝福となりますように祈ります。
(曾根田健二)

今期のテキストの翻訳は教団翻訳部、抄訳、適用、並びにミニガイドは曾根田健二先生が、校閲、校正は出版編集部、最終校閲を安息日学校協力牧師並びに教団安息日学校部が担当し、各課の「問」は視覚障害者のために通し番号を付けました。口語訳聖書、新共同訳聖書からの聖句引用に関しては、日本聖書協会の承認を受けております。

目次

重要な黙示預言

序言	2
第1課	黙示預言の解釈 4月6日 ... 6
第2課	ダニエル書2章、7章(黙示預言のABC)	... 4月13日 ... 14
第3課	人の子と最後の審判 4月20日 ... 22
第4課	ダニエル書8章(天の万軍の君) 4月27日 ... 30
第5課	ダニエル書9章(メシアの来臨) 5月4日 ... 38
第6課	終末論的贖罪日 5月11日 ... 46
第7課	マタイ24章(黙示預言に関するイエスの説教)	... 5月18日 ... 54
第8課	子、教会、竜(黙示録12章) 5月25日 ... 62
第9課	海から現れた獣(黙示録13:1~3) 6月1日 ... 70
第10課	地から現れた獣(黙示録13:11~18) 6月8日 ... 78
第11課	三天使のメッセージ(黙示録14:1~12) 6月15日 ... 86
第12課	祝福に満ちた希望 6月22日 ... 94
第13課	黙示預言の完成 6月29日 ... 102



第1課

4月6日

黙示預言の解釈

● 暗唱聖句 ●

「王様が求められている秘密の説明は、知者、祈祷師、占い師、星占い師にはできません。だが、秘密を明かす天の神がおられ、この神が将来何事が起こるのかをネブカドネツアル王に知らせてくださったのです」
(ダニエル書2:27、28、新共同訳)

「王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです」
(ダニエル書2:27、28、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

3月30日

時間に関する聖書の思想の特徴は、直線的な時間という思想に立ち、時間には特定の始まりと特定の終わりがあるという考え方です。これは時間を円、循環、^{るてん}流転すると考える他宗教の教えや概念と対照的で、多くの人は、この世は絶えず円のように巡り、決して終わることがないと思っています。聖書は、この世界に特定の始まりがあったこと、特定の終わりがあることを教えています。私たちは過去の歴史を知っていますが、本当に知りたいのは未来のことです。将来どんなことが、いつ、どのような理由で起こるのか、そのことは私たちの生き方にどのような影響を与えるのかということです。

こうした私たちの思いを知る神は、黙示預言という「不思議」な方法で将来を開示してくださいました。神が象徴や比喻という難解に見える方法でメッセージを伝えられたのは私たちに事柄が重要であることを気づかせ、また熱心に真理を探求させるためでした。神はさらに象徴や比喻を解く方法も聖書の中に示してくださっているのです。今週の研究はその方法についてです。

日曜日

歴史の概念

3月31日

「だが、秘密を明かす天の神がおられ、この神が将来何事が起こるのかをネブカドネツアル王に知らせてくださったのです。王様の夢、お眠りになっていて頭に浮かんだ幻を申し上げます。」(ダニ2:28)

NOTE

昔から多くの聖書研究者がバビロンに捕囚となっていたこのユダヤ人預言者の言葉を調べてきました。その結果、特にダニエル書2、7、8章の預言から明らかになったのは、ダニエル書が広範囲に及ぶ世界歴史を扱っているということでした。ダニエルが扱っているのは単に一つの時代、一つの国ではなく、何世紀にも及ぶ世界の歴史そのものです。

問1 ダニエル2:38、8:20、21を読みましょう。聖書は4王国のうち3つの名を挙げていますが、預言の範囲は過去のこと、それとも未来だけでしょうか。この聖句を読んで預言解釈上の方法について考えてください。

ダニエルは自分の時代から「終わりの時」(ダニエル書に5回出てくる表現)までの世界歴史について描写しています。このことから、ダニエルの扱っている問題がきわめて広範囲に及ぶものであることがわかります。この事実を知ることは重要です。なぜなら、ある人たちはダニエルの預言がキリスト教以前の過去にのみ適用されると考えるからであり、別の人たちは逆にそれらが現代よりもはるか先の将来の出来事を指すと考えるからです。

ダニエルの預言が彼の時代から終わりの時に至るまでの世界歴史にかかわるものであると結論づけることができるのは、たとえばダニエル書7:17、18で、天使自身がそのように解釈しているからです。多くの聖書解釈者はこれらの預言が終わりの時にかけて次々と出現する国々の歴史であると理解してきました。これは歴史的解釈と呼ばれるもので、SDA預言理解の基礎となっています。

ダニエル書2章にある世界帝国の預言と歴史をほかの人に説明できるまで、よく理解してください。未来につながる出来事だからです。

NOTE

「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら 読者は悟れ、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい」(マタ 24 : 15、16)。(ルカ 21 : 20 ~ 22 参照)

注意深く読んでください。これはイエスご自身が黙示預言(ここではダニエル書)を解釈しておられる数少ない例の一つです。主は聖書解釈に関して非常に重要な原則を明らかにしています。

問2 前後関係を見ながらマタイ24:15、16を読みましょう。イエスは誰に向かって話していますか。どんな質問に答えたのでしょうか。イエスの解釈の背景を考えてみましょう。

キリストの言葉は黙示預言、特にダニエル書を理解しようとする人たちにとって非常に重要なことを教えています。イエスの預言解釈は非常に大事なことを今日に向けて教えています。イエスは“憎むべき破壊者”に関するダニエル書のこの部分(ダニ9:27、11:31、12:11 参照)を、地上におけるご自身の時代以後に実現するものとして解釈しておられます。これらの言葉は紀元31年頃にイエスご自分の弟子たちに語ったのでした。これらの預言がイエスの時代以降に起こることとして述べておられます。

一般的に多くの聖書学者や解釈者はダニエル書の預言はキリストより2世紀前のことと理解しています。つまり、彼らはこれらを預言として考えておらず、また将来や終末の諸事件としてでなく、紀元前2世紀のギリシア王アンテオカス4世のユダヤ人迫害とユダヤの愛国者マカバイの反乱についての記事と解釈しています。ところがイエスの言葉は、イエスの時代以降のこの予告として語ったのでした。一義的にはローマ帝国によるエルサレム滅亡を主は預言したのでした。過去の解釈でなく、歴史的解釈が主の理解でした。

私たちは世俗主義がキリスト教信仰に挑戦している時代に生きています。「聖書は過去の本だ。聖書に将来を明らかにする預言は全くない。私たちの将来と全く関係がない」と信じ込ませる思想です。ダニエル書についてのイエスの解釈には大事な意味があります。

火曜日

象徴の解釈

4月2日

黙示文学には多くの象徴が用いられています。これらの象徴は多くの聖書研究者に刺激を与え、靈感を与えてきました。

象徴はある特定の事柄、国、人物、考え、思想を表現します。象徴とそれが象徴するものとの間に必然的な関係がない場合もあれば（たとえば、信者を象徴する木のように）、両者の間に明らかな関係がある場合もあります（破滅を象徴する火）。いつも必ずとは限りませんが、聖書そのものが象徴の意味を説明している場合もあります。

NOTE

問3 次の象徴と聖句が提示する解釈を書いてみましょう。

金の頭	ダニ 2 : 38 _____
石	ダニ 2 : 44、45 _____
山羊	ダニ 8 : 21 _____
7つの星	黙示 1 : 20 _____
7つの灯火 <small>ともしび</small>	黙示 4 : 5 _____
水	黙示 17 : 15 _____
竜	黙示 12 : 9 _____

次の点に留意しましょう。(1)象徴の意味が聖句の中にはっきりと示されていて、解釈を助けてくれる場合があります。(2)象徴の意味が前後関係を見ればわかる場合があるので、聖句の前後関係に十分注意を払う必要があります。(3)一つの象徴に複数の意味がある場合は、聖書記者が用いている意味を受け入れるべきです。たとえば、水は命の象徴ですが(ヨハ4:10~14、黙示21:6)、黙示録17:15のように「群衆」を象徴することもあります。

意味が明示されていない象徴の場合、その象徴についてよく調べ、祈りつつ前後関係に最もよく調和する意味を取りましょう。

預言の中で象徴を用いているのはなぜでしょうか。預言の意味が誤解の余地のないようにはっきりと示されていないのはなぜでしょうか。主が私たちに預言を深く研究するように望んでおられるからでしょうか。あるいは、それらの意味を一部の人々から隠そうとしておられるからでしょうか。あなたはどのように思いますか。

NOTE

「だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起こり、不法の者、つまり、滅びの子が出現しなければならないからです。この者は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して、傲慢^{ごうまん}にふるまい、ついには、神殿に座り込み、自分こそは神であると宣言するのです。まだわたしがあなたがたのもとにいたとき、これらのことを繰り返し語っていたのを思い出しませんか。今、彼を抑えているものがあることは、あなたがたも知っているとおります。それは、定められた時に彼が現れるためなのです。不法の秘密の力は既に働いています。ただそれは、今のところ抑えている者が、取り除かれるまでのことです。その時が来ると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御自分の口から吐く息で殺し、来られるときの御姿の輝かしい光で滅ぼしてしまわれます」(テサ2:3~8)

問4 預言解釈という今週のテーマを考えながら、上記の聖句を注意深く読んでください。パウロはここで再臨のクライマックスとなる一連の預言的の事件に言及しています。起こるべき出来事の順に書いてみましょう。

パウロによれば、これらの出来事のいくつかはすでに彼の時代に始まっていました(「不法の秘密の力はすでに働いています」7節)。パウロもダニエルと同様に、黙示預言の実現を歴史の流れの中で、つまり自分の時代に始まり、世の終わりにおいて最高潮に達するものとして理解しています。ここにもまた、預言的の事件が歴史的な流れの中で起こると考える歴史的解釈のはっきりとした実例を見ることができます。パウロは明らかに、すべての預言が過去のある時点で実現したとする見解(過去の解釈)に同意していませんし、また、すべての預言がはるかな未来のある時点で実現するとする未来的解釈の立場を受け入れてもいません。

過去に関する預言はその預言の通りに実現しました。このことはまだ実現していない預言に関する私たちの信仰を強めてくれます。預言は何を目的に与えられたと思いますか。

木曜日 キリスト中心の解釈(ルカ24:27、ヨハ5:39)

4月4日

黙示預言の第一目的は最終諸事件の予告ではなく、歴史の流れを支配しようとする悪魔を打ち破るキリストを紹介することにあります。ダニエル書は黙示預言の中で様々なイエスの称号を書き、キリストがダニエル書の預言の中心であることを啓示しています。

NOTE

問5 ダニエル書に出てくる下記の語句と聖句を組み合わせてみましょう。誰を象徴していると思いますか。

7:13、8:11、8:25、9:25、9:26、10:13、10:21、12:1
油注がれた君、人の子、天の万軍の長、大天使ミカエル、大天使長ミカエル、天使長ミカエル、最も大いなる君、油注がれた者

黙示録もキリストが最後の大争闘における中心人物であることを強調しています。この書はキリスト論的な称号で満ちていますが、それらは救い主の多様な働きを示しています。キリストは地上の王たちの支配者(黙示1:5)、神の子(2:18)、獅子・ひこばえ(5:5)、小羊(5:6)、神の言葉(19:13)、王の王、主の主です(19:16)。私たちはキリスト、しかもキリストによってのみ贖われ(5:9)、罪から清められ(7:14)、悪に勝利します(12:11)。最後の闘争において、キリストとキリストの民に戦いを挑む勢力は滅ぼされます(17:14)。私たちが聖書の中で繰り返し「喜びなさい、信じなさい」と教えられているのはそのためです。神は世を支配しておられます。キリストは十字架においてすでに私たちがあがない、敵を打ち破られました。主は私たちのために完成された救いを受け入れるように招いています。キリストが私たちの罪のために法的な刑罰を受けられたゆえに、彼の犠牲を受け入れる人はだれひとり自身で刑罰を受ける必要はありません。

戦争、地震、災害、そのほか終末の苦難について様々な幻が与えられています。しかし不安の中に一つ確実なことがあります。私たちがイエスを受け入れる限り、最後の勝利は約束されています。もし私たちの周りに困難と闘っている人がいたら、キリストにある最後の勝利の約束を語り、慰めと希望を与えてあげてください。

NOTE

黙示的預言を研究するとき、そこに偉大な世界的王国興亡の歴史を見ることが出来ます。今週学んだダニエル、イエス、パウロの言葉を読むとき、預言に対して歴史的解釈というアプローチを取っていることに気づきます。ただ過去、あるいは未来の出来事としてでなく、聖書自身が過去、現在、未来に関わる預言であることを教えています。こうした立場を取るとき、神は過去も現在も、そして未来もご支配くださるといふ慰めと励ましを得ることが出来るのではないのでしょうか。

もっと深く学びたい方へ

『患難から栄光へ』下巻 282 ~ 300 ページ (ヨハネ、黙示録を書く) を読んでください。

黙示預言についての歴史的解釈の立場は「初期の教父たちによって5世紀まで用いられていたものでした。リロイ・E・フルームによれば、預言の解釈に大きな変化が起きたのは、アウグスチヌスが神の国をキリスト教会と定義し、千年期を霊的に解釈して、キリスト教時代の象徴としたときからです(『我らの父祖たちの預言的信仰』第1巻473~491ページ)。彼の見解は中世において支配的となり、プロテスタント改革期まで続きました。再び歴史的解釈をダニエル書と黙示録の解釈法として復活させたのは宗教改革者たちでした」(『SDA 百科事典』698、699ページ)。

「黙示録には神の奥義が描かれている。……その真理は、ヨハネの時代に生きていた人々と同様に、この地上歴史の最後の時代に住む人々にもあてられている。この預言に描かれている場面のあるものは過去に起こったものであり、あるものは今起こりつつある。またあるものはやみの権力と天の君との大争闘の終結を見させ、またあるものは新しくされた地に住むあがなわれた者たちの勝利と喜びを表している」(『患難から栄光へ』下巻 288 ページ)。

ある種の預言はまだ成就していません。それらを解釈する場合、どのようにしたら間違いを避けられるでしょうか。エレン・ホワイトの著書は助けになるでしょうか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

【ダニエルの時代】 黄金時代を誇ったダビデ・ソロモンの王国は前931年に分裂し、北の国イスラエルはどう猛なアッシリア帝国によって滅ぼされ（前721年）預言者たちが警告したにも関わらず、悔い改めないユダも同じ運命をたどりました。バビロン王ネブカドネツアルは前605年にユダを攻め、ダニエルら王族の若者たちは異教バビロンに捕囚となりました。さらに攻撃は続き、597年、そして586年にはエルサレムは完全に占領されました。列強がひしめく中東の国々に翻弄されて神の民は今後どうなるのか、いつまでこの捕囚の屈辱は続くのか。メシア来臨の約束も潰れ去るのか……。

こうした絶望的な時代にダニエルは苦難の民に希望を与える将来を約束しました。ダニエル書は第一義的には捕囚にある民に光を与える役目を果たしました。

【預言の解釈】 旧約のダニエル書、新約の黙示録はいろいろな象徴や比喩で書かれているために理解するのが困難に見えます。それにもかかわらず、主は弟子たちに「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら 読者は悟れ 」(マタ24:15)とダニエル書を引用して時代の警告をされました。過去の歴史の中で多くの人たちが預言を解釈し、中にはとっぴな教えを説いて人を惑わしました。19世紀のSDA指導者たちは祈りとともに預言の研究をしましたが、彼らは預言の語句を聖書の言葉で解釈するという方法で研究を進めました。この聖書研究ガイドでもたびたび別の場所の聖句を引用して語句の意味を解釈しようとしていることに注目してください。預言の勉強では勝手な解釈をしないように慎重な態度が必要です。キリスト教会には黙示録などの預言の解釈にいくつかの派があります。

歴史的解釈 将来に関わる預言は世界の歴史において成就し、キリスト再臨をもって完結する。

過去の解釈 当時の状況下で書かれ、過去において既に成就している。

未来的解釈 預言は世界歴史の終わりに現れる反キリストの滅びによって成就する。

霊的解釈 各時代におこる善と悪の永遠の戦いを代表し、義は最終的に勝利する。黙示語句は特別な歴史事件と関係ない。

アドベンチスト教会は、基本的には16世紀の宗教改革者たちと同じ歴史的解釈の立場を取っています。



第2課

4月13日

ダニエル書 2章、7章 (黙示預言のABC)

● 暗唱聖句 ●

「天下の全王国の王権、権威、支配の力は / いと高き方の聖なる民に
与えられ / その国はとこしえに続き / 支配者はすべて、彼らに仕え、彼
らに従う」 (ダニエル書 7:27、新共同訳)

「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与
えられる。彼らの国は永遠の国であって、諸国の者はみな彼らに仕え、
かつ従う」 (ダニエル書 7:27、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月6日

聖書の中で私どもの信仰を強め、励ましてくれる預言はダニエル書 2章と7章です。これら二つの章の中で、ダニエルは神の力によって自分の時代から私どもの時代まで、そして神が最後の王国を確立される世の終わりまでの世界の歴史を描写しています。神はこれらの2章の中に、聖書の靈感を信じる上で必要な合理的根拠を与えておられます。

ダニエル書 2章と7章は同じ出来事を異なった視点から描いています。2章は地上の諸国の興亡を強調していますが、7章は永遠の王国が確立されるまでの神の民の経験を強調しています。また、2章は王国の歴史に焦点を当てていますが、7章は神の民と世俗権力との対立を強調しています。

ダニエル書 2章と7章に見られる預言は歴史を、一般歴史書には見られない次元に立って、霊的な角度から描いています。これらの章は純粋に宗教的な記録であって、この世の歴史が神の活動の領域であるということを示しています。両章はまた、神の王国が地上の国に勝利するという結末をもって終わっています。「人の子」は重要な役割を果たし、神の民は彼によって王国を受け継ぎます。

日曜日

並行した二つの幻

4月7日

ダニエル書2章と7章は異なった象徴を用いていますが、内容は互いに並行しています。

《ダニエル書2章》	《ダニエル書7章》
純金（32節）	獅子（4節）
銀（32節）	熊（5節）
青銅（32節）	豹（6節）
鉄（33節）	第4の獣（7、8節）
神の国（34、35節）	神の国（14節）

NOTE

主は最初の3王国をダニエル書の中で明示し、第4の象徴も誤解の余地がないほどに明らかにしておられます。純金と獅子で象徴される第1の王国はバビロンです（ダニ2：38）。銀と熊で代表される第2の王国はダニエル5：28、30、31、8：20でメディア・ペルシア帝国であると言われています。第3の王国は青銅と豹で象徴され、ダニエル11：2によればギリシアです。第4の王国（鉄と第4の獣）の名前は明示されていませんが、世界歴史に当てはまる国はローマ以外に考えられません。

問1 ダニエル書2章とダニエル書7章のどのような特徴から第4の王国を“ローマ”と解釈するのでしょうか。

神学者はこの二つの章を“要点の反復、繰り返し”と受け取っています。単純に繰り返されている預言があり、異なった角度から、その基本的なメッセージを補強するように繰り返されている場合もあります。同じ歴史期間を異なった観点から描き、それぞれの出来事に含まれる新たな要素を啓示するというケースです。ダニエル書2章と7章はバビロンの時代から地上歴史の終わりまでを描写しています。7章は2章の内容を繰り返してはいますが、同時にそれを拡大・発展させているのです。

神を信じない家族の中でホセだけがアドベンチストでした。でもダニエル書2章と7章と一緒に学んだ家族は、ホセの信仰を認めてくれるようになりました。これらの預言が確信を与えたのでした。

NOTE

「第4の国は鉄のように強い。鉄はすべてを打ち砕きますが、あらゆるものを破壊する鉄のように、この国は破壊を重ねます(ダニ2:40)。「更にわたしは、第4の獣について知りたいと思った。これは他の獣と異なって、非常に恐ろしく、鉄の歯と青銅のつめをもち、食らい、かみ砕き、残りを足で踏みにじったものである」(ダニ7:19)。

問2 第4の王国を象徴する特徴を挙げてください。

ローマ帝国を表す獣はほかの獣とは全く異なっています。ダニエルはそれを「ものすごく、恐ろしく、非常に強く」(ダニ7:7)と表現しています。この国は敗れたことのない国、また戦争によって征服されたことのない国でした。『ケンブリッジ古代史』によれば、「紀元前3世紀末以降のローマの政策は攻撃的なものであって」、その目的は交渉によって紛争を解決することよりも、戦争を回避できないような要求を他国にすることにありました(A・E・オースチン編、第8巻382ページ)。被征服民族へのローマ帝国の態度は、「鉄の歯」(ダニ7:19)の表現通り残酷極まりないものでした。

問3 強力なローマ帝国はどうなるのでしょうか。ダニ2:41、7:24

ローマ帝国が崩壊した背景として多くの理由を挙げるができます。「帝国を崩壊させたものは、4世紀の後半において絶えず繰り返された大規模な侵略であった」(『新ブリタニカ百科事典』第15版15巻1132ページ)。

バビロンはメディア・ペルシアによって、メディア・ペルシアはギリシアによって取って代わられましたが、ローマはこれら3つの国のように他の一国によって滅亡したのではありません。ローマはダニエルの幻にあるように小さな国々に分裂したのでした。何世紀も前に、ダニエルがローマ帝国の衰亡を正確に表現したことは驚きです。もし神が諸帝国の将来を予告することができるなら、神は私の将来を御手のうちに握っておられるとしても不思議ではありません。

火曜日

小さな角(その1)

4月9日

「この大いなる教会主権の起源について考える者は、教皇権こそが亡きローマ帝国の墓の上に冠を^{しただ}戴いて座す、亡きローマ帝国の亡霊にほかならないことに容易に気づくであろう」(トマス・ホップス〔17世紀、英国の哲学者〕『西洋世界の偉大な書物に見るレピアタン』278ページ)。

NOTE

問4 小さい角の出現状況を読んでください。どんな特徴が見られるでしょうか。ダニ7:8、24

小さな角によって表される権力は、ダニエル書7章を解釈する上できわめて重要です。その特徴を挙げてみますと、

(1)それは第4の獣から出現します(ダニ7:24)。したがって小さい角はローマ帝国とは別のものではなく、その一部です。

(2)それは10本の角の後に出現します(7:8)。10本の角はローマ帝国の崩壊と分裂を表しています。小さな角はローマ帝国の崩壊後に現れました。

(3)それはほかの角よりも大きく見えます(ダニ7:20、字義的には「その外見は仲間よりも大きかった」)

(4)それは10本の角のうちの3本を引き抜きます(7:8)。小さな角は権力の偉大さを行使し、3つの国を滅ぼしました。

ローマ帝国の廃虚の中から出現して分裂した欧州諸王国の中で指導的な影響力を持つに至った新権力はローマ教会です。歴史家R・P・C・ハンソンによると、「(教会は)外見的には自らの成長をもたらした社会の恐るべき、空前の崩壊に対して準備ができていなかった。しかし、危機がやって来たとき、教会はそれに対処し、耐え、生き残り、ついには異民族の侵入と定住という新たな状況下で、全欧を支配するだけの権力を自らのうちに見いだした」(「教会と西ローマ帝国の崩壊」『初代教会における教会と国家』第7巻385ページ、1993年)のです。

「小さい角」を特定の個人ではなく制度について論じていることを伝え、また偏狭なSDA教会という印象を与えないためにはどうしたらよいでしょうか。

NOTE

「彼はいと高き方に敵対して語り / いと高き方の聖者らを悩ます。 / 彼は時と法を変えようとたくらむ。 / 聖者らは彼の手に渡され / 1 時期、2 時期、半時期がたつ」(ダニ 7 : 25)。

ダニエルは小さな角の権力、つまり教皇制ローマの特徴について詳しく説明しています。たとえば

(1) 神に敵対して語る この教会はその教権によって与えられた権威をもって語り、教義と信仰を規定し、これらに対する服従を要求します。その過程において、真理と虚偽が混ざり合いました。結果として、聖書的でない教えが真理として受け入れられました(たとえば、^{こっかい}霊魂不滅、^{むせき}苦解の秘跡、^{れんごく}煉獄、聖人の執り成し、など)。

(2) 聖者を悩ます 教えに従わない人々は迫害され、殺されました。異端審問(宗教裁判)においては、教会の「敵」に対して拷問が用いられました。「1252年に、[教皇]インノケンティウス4世は異端者に俗権によって拷問を加えることを是認したので、後に拷問は宗教裁判所の手続きにおいて公認されることになった」(『新カトリック百科事典』第14巻208ページ、「拷問と教会」、1967年)。

(3) 律法を変える 教会と国家の結合がもたらした最も大胆な行為は、神の律法を変えたことです。聖書的安息日である第7日安息日は日曜日に変更されました。この変更は教会の教権に基づいてなされ、今日もカトリックと大部分のプロテスタント教会の安息日となっています。カトリック資料には次のように記されています。「われわれが土曜日の代わりに日曜日を守るのはなにゆえか。われわれが土曜日の代わりに日曜日を守るのは、カトリック教会……が神聖さを土曜日から日曜日に移したからである(ピーター・ガイアマン『カトリック教理に関する改心者の教理問答』、1937年)。

ダニエル書2章と7章はほかのどんな権威についてよりも、この小さな角とその活動に関して詳しく述べています。このことは、この権威の実体について知ることの重要性を示すものです。この権力は今後どのような動きをしてゆくのでしょうか。キリスト教界に教会共同の動きがありますが、協力できること、協力できないこと、注意すべき限界というのがあるのでしょうか。

木曜日

時に関する最初の黙示預言

4月11日

「聖者らは彼の手に渡され / 1 時期、2 時期、半時期がたつ（ダニエル 7 : 25）。

NOTE

ダニエル7章のほかの権力と異なり、この小さな角の権力には一つの特長があります。つまり、ダニエルの黙示預言に時が初めて出現することです。この章に出てくる王国の中で時の預言と密接な関係にある王国はこれだけです。

ダニエル7 : 25の時に關するこの預言は小さな角とどう関係があるのでしょうか。預言において「日」は「年」を象徴しています。この原則は長く、多くの聖書学者によって認められてきました（ユダヤ聖書注解者たちはSDAが誕生する何世紀も前からこの“1日1年説”の原則を聖書に適用しています）。旧約聖書にはこの原則の実例がいくつも見られます。たとえばサムエル記上20 : 6に、「一族全体のために年ごとのいけにえをささげなければなりません」とありますが、この中の「年ごと」は実際には「日ごと」となっています。

問5 1日1年説のヒントが聖書にあるでしょうか。列王下1 : 1、創世6 : 3、民数14 : 34、エゼ4 : 6

ダニエル7 : 25の「1 時期、2 時期、半時期」は黙示録12 : 6で1260日として描かれています。1日が1年であるとするなら、「1 時期、2 時期、半時期」、つまり1260日は1260年ということになります。したがって、小さな角の支配は、12世紀以上続くこととなります。

侵入したアーリア人がローマから退却した後、紀元538年に教皇制ローマが台頭する道が備えられました。驚くべきことにそれからちょうど1260年後の1798年に、フランスのベルティエ元帥はローマ・カトリック教権を終わらせる目的で、教皇ピウス6世を捕らえて追放しました。事実、1798年以前にも、これらの預言を調べて19世紀の初めにかけてローマに何か重大な事件が起こると考えた聖書学者がいました。まさにその通りになりました。『SDA聖書注解』（「1 時期、2 時期、半時期」の項参照）

歴史の中で千年以上存続した国、権力があつたでしょうか。

NOTE

ダニエル2章と7章は互いに補足しあって、霊的視点から歴史を注視しています。これらの幻は正確に古代諸国の興亡、宗教権力について記述しています。聖書はこの制度、組織をそれぞれがしっかり知ることを求めています。研究を続けければ続けるほどその理由は明らかになることでしょう。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の争闘』上巻 43～58 ページ（中世の霊的暗黒時代）を読んでください。

【獣と小羊】「地上の権力を表すのにどう猛な獣の幻がダニエルに与えられています。しかしメシアの王国の象徴は小羊です。地上の王国は力によって支配しますが、キリストはすべての世俗的武器、すべての強制手段をお捨てになります。キリストの王国は墮落した人類を引き上げ、高めるために建国されるのです」(『SDA 聖書注解』第4巻 1171 ページ、エレン・G・ホワイト注)。

【教会の背教】「初代教会は、福音の単純さを離れて墮落し、異教の儀式と習慣を受け入れたときに、聖霊と神の力を失った。そして、人々の良心を支配するために、世俗の権力の援助を求めた。その結果が、法王権であって、それは、国家の権力を支配し、それを教会自身の目的、特に『異端』の処罰のために用いた教会であった」(『各時代の争闘』下巻 162, 163 ページ)。

多くの人々は過去においてキリスト教が関わった不寛容、宗教裁判、迫害、戦争、流血の歴史のゆえに教会に懐疑的、批判的です。キリスト教信仰を伝える上で、どのように対応したらよいでしょうか。

聖書全体の教え、思想、原則から、今日見られる教会一致、教会合同の動きにどのように対処することが望ましいと思いますか。

あなたが指導している聖書研究会の中にカトリックのお友だちが出席していたら、どのように勉強を進めますか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

今週の研究で、早くも「小さい角 ローマ・カトリック教会」が出てきます。私たちは他教派について語るときに注意深くありたいと思います。他教派が書いているSDAについてのコメントが誤解に基づくものであれば、SDAである私たちはいい気持ちはしませんし、「もっと勉強して正しく書いて欲しい」と思うに違いありません。まして安息日学校にカトリックの方がお出でになればどうでしょう。十分な知識も持たずに軽率に語ったり、その教会が教えていないことを私たちが勝手に曲げて教えたりするのは正しくありません。そこで次の諸点を考慮してください。

(1) “小さい角”が意味することは制度、組織、教えであって、決して個人の人格、品性を指摘するものではありません。

(2) ヨーロッパ中世時代の教会の過去の歴史事実と、現代カトリックの傾向や方向性とを混同、同一視しないようにしましょう。パチカンも歴史の過ちを認めて謝罪しています。ヨハネ・パウロ2世教皇は「歴史のある時期に不寛容や暴力的措置が取られたことを悔やまずにいられない」との書簡を発表（1994年11月14日）「自らの良心をもう一度見詰め直そう」とカトリック世界に自省と出直しを呼びかけました。

(3) カトリック教会とプロテスタント教会とは基本的に拠って立つ根拠、土台が違います。カトリックにとっては聖伝（伝承）と聖書の両方が教えの柱で、教会そのものを権威としているのに対し、プロテスタントは人や組織でなく“聖書のみ”と考えます。マリア崇拜や聖人尊崇、司祭にある贖宥しよくゆうの権限、聖職者の独身制度、安息日の変更などが聖書的でないと批判しても、出発点が違うのかみ合わないのは当然です。

(4) キリスト教背景が弱い日本において教会同士の批判、争いは醜く映るでしょう。仏教には血なまぐさい歴史はまれですが、西欧の歴史にキリスト教が果たした役割は大きく、王や民衆を動かして戦争や裁判を繰り返してきた過去は、多くの知識人たちにキリスト教への失望、嫌悪感を与えてきました。カトリックの迫害については他人事とは思われず、私は同じクリスチャンとして恥ずかしくさえ思います。アイルランドにおける新旧教徒間の流血紛争は今日でも人々に宗教の怖さや疑問を投げかけています。SDA教会が他教派について悪意をもって語れば、私どもが一生懸命に伝道しようとしている日本人大衆の冷たい反応を受けるではありませんか。今期はこうしたデリケートな問題を扱いますが、偏見を持たずに公正、客観的に学びましょう。



人の子と最後の審判

● 暗唱聖句 ●

「その前から火の川が流れ出ていた。 / 幾千人が御前に仕え / 幾万人が御前に立った。 / 裁き主は席に着き / 巻物が繰り広げられた」
(ダニエル書7:10、新共同訳)

「彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた」
(ダニエル書7:10、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月13日

先週はダニエル書2章と7章を学び、これらの章において、神の教会に関連した歴史が示されました(バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、ローマ〔多神教帝国および教皇制〕)。しかし、ここに描かれた出来事のすべてが地上の出来事ではありません。事実、ダニエル書7章は天における大いなる裁きの光景と、それに続く最終的な神の王国の確立をもって終わっています(26、27節)。

「1時期、2時期、半時期」(ひと時と、ふた時と、半時の間:口語訳)の後、大いなる天の裁きが行われることがダニエル7章に3度にわたって述べられています(9~11、21、22、25、26節)。その目的は小さな角の支配について描写することにあります。そこには次のような事柄が明らかにされています。

- (1) 小さな角(25節)
- (2) 天における裁き(26節)
- (3) 再臨(27節)

ダニエル書は再臨前審判について明確に教えています。裁きがあることはどの教派のクリスチャンも信じていますが、違うのはその時期、目的、性格です。今週はこの重要なテーマについての聖書の教えに目を向けましょう。

日曜日

裁かれる神

4月14日

「父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。……また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである」(ヨハ5:22,27)。

聖書は繰り返し裁きがあることを明らかにしています。上記の聖句を読むと、イエスご自身が裁きを行われるとあります。

NOTE

問1 なぜイエスが裁き主なのでしょう。理由は27節にあります。

「自ら人性を取り、この世において完全な生涯を送られた方が私たちを裁かれます。彼だけが私たちの裁き主となることができます。……キリストが人性を取られたのは私たちの裁き主となるためでした」(『教会へのあかし』第9巻185ページ)。

「キリストは、人間のあらゆる苦悩と試みとを経験し、人の弱さと罪とを理解されるので、また主はわれわれのためにサタンを試みに抵抗して勝利し、救うためにご自身の血を流された魂を正しく、やさしくとり扱われるので、このゆえに、人の子イエスは、さばきを行うように任命されているのである」(『各時代の希望』上巻258ページ)。

イエスが人間であられたゆえに、またイエスが私たちの悲しみと痛みと苦しみを味わわれたゆえに、イエスが私たちの裁き主でなければならないとこれらの言葉は述べています。

北米インディアンのことわざに「その人の靴を履いて歩いてみるまでは人を裁くな」というのがあります。「わたしたちと同様に試練に遭^あわれた」イエス(ヘブ4:15)、「罪深い肉と同じ姿でこの世に」来られたイエス(ロマ8:3)、「肉となって、わたしたちの間に宿られた」イエス(ヨハ1:14)、「女から……生まれた」イエス(ガラ4:4) 彼だけが、私たちを裁かれます。なぜなら、彼は「私たちの靴を履いて歩かれた」からです。

裁きは避けられませんが、人として私たちと同じように誘惑に遭い、同じように悲しみと苦しみを経験されたイエスが私たちの裁き主です。これはなんとという慰め、支えでありましょうか。

NOTE

「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです（コリ5:10）。

「神は、善をも悪をも／一切の業を、隠れたこともすべて／裁きの座に引き出されるであろう」（コヘ12:14）。

審理や調査を全くしない公平な裁判というものはありません。当人の行為を取調べることなしに刑を宣告するのは独裁的で、今も現実にはありますが、これは最も基本的な人権を踏みにじるものです。古代の昔でも裁判に先立って取調べがなされました。

問2 使徒言行録25:4～12を読み、裁きにおける調査審問の例を調べてみましょう。

イスラエルの訴訟手続きにおいて、証拠調べはきわめて重要な意味を持っていました。「調査活動……の目的は、特定の事件(犯罪)を明るみに出し、その犯罪の種類と犯人を知ることによって、真実と正義にしたがって訴訟を進め、犯罪者に判決を下すことを可能にする」(ピエトロ・ボヴァティ『正義の回復』241ページ、1994年)。

問3 人類墮落において神はまずどのような法的手順をとりましたか。創世3:8～19

創世記3:8～19において、神は検事、判事として求刑、宣告なさる前に「聞き取り調査」をしました。神はアダムとエバに、「どこにいるのか」、「お前が裸であることを誰が告げたのか」、「木から食べたのか」と尋ねて判決を下すために必要な情報を集めておられます。神はすべてを知っておられるので、「自分たちのしたことをアダムとエバに明確に」されたのです(クラウス・ウェスタマン『創世記1～11章注解』254ページ、1984年)。

聖書は各所で最終審判における調査の過程を述べています。このことは私たちに今の生き方、救い主の必要について教えていますか。

火曜日

裁きが来た

4月16日

「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」(ヘブ9:27)。

NOTE

問4 ローマ2:5～8にはどんな教訓がありますか。

新約聖書は最後の裁きの時期に関して重要な事実を明らかにしています。

(1) 裁きは一般的に私たちの生きているうちには行われません。最後の世代を除いて品性が決定するのは死んでからです。

(2) 裁きは「怒りの日」 再臨の日と関係があります(ロマ2:5、テモ4:1)。その日、各人はその行いにしたがって報いを受けます。

(3) 再臨において、神の「正しい裁き」が現されます(ロマ2:5)。この場合の「裁き」は天の法廷においてなされた正式の決定をさします。キリスト再臨において、天で下された評決が現され、ある人は死に、ある人は永遠の命に定められます(6～8節)。

問5 救済計画においてダニエルは最後の裁きをどこにおきましたか。ダニ7:9、10、25、26

ダニエルによれば、最後の裁きは次のように進められます。

- (1) それは天の法廷で、神と天使と人の子の前で開始されます(ダニ7:9、10、13)。
- (2) 決定が下される前に、種々の書物が調べられます(10、22節)。
- (3) 評決の結果、聖者は勝利し、敵には有罪が宣告されます(22、26節)。
- (4) それは小さな角によって引き起こされた1260年間の迫害後の、ある時点において始まります(25、26節)。

裁きの思想はあなたに慰めを与えてくれますか。それとも恐れを抱かせますか。もし私たちが恐れているとすれば、それは私たちが正しい生活をしていないか、神と神の愛を正しく理解していないかです。裁きを正しく理解するためにはどうしたらよいでしょうか。

NOTE

「わたしはまた、死者たちが、大きな者も小さな者も、玉座^{ぎょくざ}の前に立っているのを見た。幾つかの書物が開かれたが、もう一つの書物も開かれた。それは命の書である。死者たちは、これらの書物に書かれていることに基づき、彼らの行い^{よみ}に応じて裁かれた。海は、その中にいた死者を外に出した。死と陰府も、その中にいた死者を出し、彼らはそれぞれ自分の行い^{よみ}に応じて裁かれた。死も陰府も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。その名が命の書に記されていない者は、火の池に投げ込まれた」(黙示 20 : 12 ~ 15)。

好むと好まざるにかかわらず、聖書は悪人たちの最終的な裁きについて記しています。失われた人たちとは、神が何らかの方法で与えておられた光を自分自身の選択によって拒んでしまった人たちです。裁きという主題が重要な意味を持つのは、それが大争闘全体における根本的な争点、つまり神の品性に関係しているからです。

最終的な宣告が執行される前に、悪人の裁きに関して調査がなされます。この調査は千年期の間になされ、救われた人たちもこれに参加します(黙示20:4)。サタンと彼の天使たちは裁かれ(コリ6:2,3、ペト2:4)、千年期の終わりにその宣告が執行され、悪人は滅ぼされます(黙示20:12~15)。この裁きの過程を要約すると次のようになります。

【最後の裁き】

裁きの始まり	キリストの再臨	千年期	裁きの終わり
聖者の調査審判	聖者の報い	悪人の調査審判	悪人の執行審判
再臨の前に天で	再臨のとき地上で	千年期の間天で	千年期後に地上で

私たちは第2の死をもって永遠の滅びと考えますが、一般的には地獄に落ちた人たちは生きたまま永遠の火によって苦しめられると考えられています。この二つの教えを比較すると神についてのどんな異なった見方が考えられますか。

木曜日

裁きの目的

4月18日

「そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう」(ロマ2:16)。(使徒24:25参照)

NOTE

問5 裁きと福音は両立しますか。律法の行いによらず信仰によって救われるとすれば、裁きをどう理解したらよいでしょう。ロマ3:28

福音と最後の審判は不可分で、福音は裁きにおいて完成を見ます。裁きの目的には次のような点があります。

- (1) 神の民についての真理を明らかにする 裁きには証拠調べがあり、神が最終判決をくだして“忠実な民”を擁護されます(ダニ7:22)
- (2) 神の正義と愛を啓示する 裁きはだれが有罪、無罪かを神に知らせるためのものではありません。むしろ、それは注目している全宇宙の前に神の正義と愛を啓示するものです(ロマ3:4、詩51:6)
- (3) 宇宙に調和を回復する 善と悪の争闘の結果、宇宙は不和によって分断されました。赦された人々に報いを与え、宇宙の悪を根絶し、罪から清めることによって、最後の裁きは調和を回復します。そのとき、キリストによる神の救いのみ業は完成します(黙示11:15~18)
- (4) すべての人と悪の勢力に自分の行為の責任を負わせる 裁判によって集められた証拠を目の当たりにするとき、誰もが自分に対する神の判決の正しいことを認めます。キリストを自分の救い主として受け入れた人たちは、永遠の死を受けるべき自分たちが永遠の命を受けるのは、ただキリストの恵みによってであることを認めます。悪人たちも自分が永遠に死すべき者であることを認め、裁きにおいて、神の判決が正しいことを悟ります(フィリ2:9~11)
- (5) 個人的な霊的成長を促す 最後の裁きの教えは私たちにクリスチャン生活において神への信頼を堅持するように迫ります。裁きは私たちにキリストへのまったき依存を教えます。裁きは私たちの救いを不確実へと導くものではなく、むしろキリストにある確信をいっそう確かなものとしてくれます(ロマ8:1)

裁きは神のなさること、神は常に正義であることを信じますか。

NOTE

最後の裁きはキリストのみ業の完成を告げるものです。それはキリストに従うことを告白した人々の再臨前審判をもって始まり、千年期後の悪人への執行審判をもって終わります。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の争闘』下巻210～226ページ(天における調査審判)を読んでください。

今週の研究のまとめとして、次の点に留意してください。

(1)「人の子」のような者が「日の老いたる者」の前に来る(ダニ7:13)「われわれの大祭司は、天使たちを従えて、至聖所に入り、神のみ前で、人類のための彼の最後の務めをなさる。それは、調査審判の働きであり……」(『各時代の争闘』下巻211ページ)

「つまり、ダニエル書7:9～14は終末論的贖罪日について述べている。……それは、まことの大祭司が香の煙に囲まれた『日の老いたる者』のもとに来られるときである」(クリスピン・H・T・フレッチャー「ヘブライ語聖書における仲保者としての大祭司　ダニエル書7:13を事例として」『1997年聖書文学学会研究論文』186ページ)

(2)数々の天の記録「いのちの書には、神の働きをしたすべての人の名が記されている。……神の前に、『覚えの書』が記されているが、それには、『主を恐れる者、およびその名を心に留めている者』の善行が記録されている(マラキ書3:16)。……また、人々の罪の記録もある(『各時代の争闘』下巻212、213ページ)

種々の天の記録がどのようなものであるかは、私たちにはわかりません。しかし、人々に関してなされた決定が事実、あるいは客観的な証拠に基づいたものであることだけははっきりしています。裁きが客観的なもの、神の正義がすべての人に認められるものでなければならないからです(黙示15:4)。

聖書もエレン・ホワイトも最後の裁きについての教えを人の信仰を励まし、生活を高めるものとして書いています。どうしたら裁きの積極面を伝えることができるでしょうか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

裁判はたしかに悪を裁いて刑を定めるものですが、その反面、不当な告訴に対して無罪を宣言してくれます。犯罪者は裁判所が自分に下す罰を恐ろしく思うでしょうが、無実の者にとってその判決の日は晴れて堂々と自由に生きることが許される人生最良の日でありましょう。パウロは「恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下される」と書きました(ロマ5:16)。信仰者は裁きを消極的にとらえるのではなく、自由と解放、救いの喜びを受ける日として賛美と感謝をもって迎えることができます。

神は義、聖なるお方であり、その聖性に罪の審判という教えの根拠があります。神は善と悪とを分かち、不義を裁き、排除する律法の授与者、執行者、正義を行うお方としてユダヤ民族は理解し、あがないの日は一方で「裁きの日」、その一方で「救いの日」として年間を通じて日ごとに準備し、かつ待望していました。

カトリック教会には「四終」という教理があり、死、審判、天国、地獄を言います。「しばしばこれについて考えることは、救いのために大切」と“教会要理”に書いてあります。ところが「最近になって(カトリックの)進歩的な学者は悪魔にだまされ、^{てうまん}傲慢にもキリストご自身の教えをゆがめ、悪魔も地獄もないと教え始めた。……すなわち、地獄についてのキリストのことは文字通りに解釈するのは幼稚なことである。キリストが地獄の話をしたのは、当時の文化程度の低い人を^{おびや}脅かすためであって、地獄が永遠であることを教えるつもりはなかった、とその人は書いていた。同じような異端説を平気で教える司祭が日本の教会にも幾人もいる。彼らがこうするのは、現代人の感受性を傷つけないためとっている」と嘆いている神父がいます(『地獄について』デルコル神父著)。

「イエズスは人間の耳に聞きづらいことを弱めたり、隠したりすることがなかった。ファティマに出現した聖母も、歴史の聖徒たちも地獄を明らかに話した。『あなたは四終を思い出せ、そうすれば永遠に罪を犯さないだろう(シラの書7:36)』とも書きました。SDA教会にはこうした問題はありますが、学ぶべき教訓があるように思います。



第4課

4月27日

ダニエル書 8章 (天の万軍の君)

● 暗唱聖句 ●

「彼がわたしの立っている所に近づいて来たので、わたしは恐れてひれ伏した。彼はわたしに言った。「人の子よ、この幻は終わりの時に關するものだということを悟りなさい」 (ダニエル8:17、新共同訳)

「すると彼はわたしの立っている所にきた。彼がきたとき、わたしは恐れて、ひれ伏した。しかし、彼はわたしに言った、『人の子よ、悟りなさい。この幻は終りの時にかかわるものです』(ダニエル8:17、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月20日

ダニエル8章は多くの点で7章と似ていますが、7章にはない主題について述べています。たとえば、地上における人間キリストでなく、天の聖所における大祭司キリストに対する攻撃という点です。

ダニエル8章には聖所に関する象徴と言葉がよく用いられています。ダニエル7章で象徴として用いられている獣は汚れた獣(獅子、熊、豹)ですが、8章で用いられているのは清い動物(雄羊、雄山羊)です。ダニエル8章の動物はイスラエルの聖所の儀式(贖罪日においても)で用いられていた動物です。主は読者の心を聖所に向けさせ、それによって私たちがこの幻を理解し、解釈する助けにしようとしておられるように思われます。

ダニエル8章はまた国家間の歴史的戦いと霊的戦い、すなわち、横の関係と縦の関係という二つの次元の戦いを強調しています。雄山羊は雄羊を攻撃して勝利し、小さな角は南(と東とパレスチナ)を攻めて勝利します。次に小さな角はほかの国がしたことのない、天の聖所にいる「万軍の長」に向かっていきます。つまり、小さな角は天そのものを攻撃するというのです。

日曜日

世界歴史の概観

4月21日

ダニエル書8:1～14の幻は次の4つの主要な出来事に分割することができます。

1. 雄羊 2. 雄山羊 3. 小さな角 4. 清められた聖所

ダニエル2章と7章はどちらもバビロニア帝国で始まっていますが、ダニエル8章はメディア・ペルシアで始まっています。その理由は説明されていませんが、おそらくダニエルが幻を与えられた紀元前547年という時期と関係がありそうです。その頃バビロンは権力と重要性において衰退し、代わってメディア・ペルシア帝国が台頭しつつありました。バビロンが除外されたのは、おそらく国としてすでに衰退していたからであり、また主がバビロンそのものより、バビロン以後の出来事を強調しようとしたからです。

メディア・ペルシア帝国の後に別の国が興おこりました。ダニエル8章で雄山羊によって象徴されている国はギリシアです。具体的にその名前が書かれています(ダニ8:21)。額の大きな角はアレキサンダー大王です。メディア・ペルシア帝国は「高ぶった」(4節)とありますが、その後に興ったギリシアは「非常に尊大に」なり、雄羊を踏みにじります(7,8節)。アレキサンダーは紀元前323年に、有能な後継者のないまま32歳の若さで死にます(8節)。数年にわたる内乱の後、帝国は4人の将軍によって分割されます。カッサンドロスはマケドニアを、リシマコスはトラキアと北西小アジアを、セレウコスはシリアとバビロニアを、プトレマイオスはエジプトをそれぞれ領有します。アレキサンダーの急死と将軍たちによる帝国の分割についてダニエルが預言した通りになりました。「力の極みで角は折れ、その代わりに4本の際立った角が生え……」(ダニ8:8)。

NOTE

紀元前6世紀に生きていたダニエルが紀元前4世紀におけるギリシアの台頭を預言したのは驚きです。こうした預言が聖書に対する私たちの信頼を強め、試練の中であって勇気を与え、愛の神が将来を見通し、かつそれを御手のうちに支配しておられるという確信を与えてくれるではありませんか。

NOTE

問1 雄羊、雄山羊に続いて出てくる小さい角は何でしょうか。他の動物とどう違いますか。それは何をするのでしょうか。

小さな角が何を指すかを正確に知ることは非常に重要です。

第1に、それは「非常に強大に」なった(ダニ8:9)帝国を表します。「非常に尊大になった」ギリシア(8節)、「高ぶった」メディア・ペルシア(4節)と対照的です。

第2に、小さな角は分裂したギリシア帝国の一つからではなく、元の四方の一つからおこります。それはもう一つの帝国であることを暗示します。

第3に、ダニエル2、7、8章を比較すると、この角が新しい国、先の幻に出てくる第4の国を表していることがわかります。それは、南のエジプト、東のシリア、そして「麗^{うらわ}しの地」ユダヤを征服したローマです(『SDA聖書注解』英文第4巻841、842ページ)。この角は最初は前述と同じ軍事的、政治的な国でした。当初は多神教の、あるいはローマ帝国を表していました。

問2 ダニエル8:9~12を注意深く読んでください。どの時点で小さい角は(水平的な)軍事、政治面から(縦の)霊的な戦いに移るのでしょうか。何が攻撃の対象となりましたか。

小さな角は地上の国がしたことのないことをします。天に向かって力を伸ばそうとする点です。このことは神の権威に対する挑戦、また大争闘の初めにルシファーを支配したのと同じ反逆の精神を表しています(イザ14:13、14)。

小さな角による聖所への攻撃は軍事的な言葉で表現されています(12節比較)。地上の聖所においては、レビ族の“軍勢”が聖所を汚れから守りました(民数18:1~10、歴代上9:27~33)。敵が聖所本体とそこで仕えている祭司に近づくためには、まずレビ人の護衛と戦い、これを打ち破らねばなりません。これと同じ描写がダニエル8章でも用いられています。小さな角は天の万軍を攻撃し、「その万軍……の幾つかを地に投げ落とし」ます(10節)。それから聖所に入り、「天の万軍の長にまで力を伸ばし」ます(11節)。小さな角は天と天における働きを攻撃しています。

火曜日

小さな角 その2

4月23日

ダニエル8章でメディア・ペルシア、ギリシア、ローマ(多神教帝国、のちに教皇制)と歴史的に扱ってきますが、政治的拡張(横の)を意味した聖句は帝政ローマ(9節)、宗教的拡大(縦の)は教皇制のローマ(10~12節)に言及しています。ダニエルは後者について詳しく述べています。

「万軍の長」、あるいは「主の軍の將軍」という称号は聖書の中にもう一箇所あります(ヨシュ5:14)。それは主ご自身と同一視される聖なるお方(6:2)、つまり受肉前のキリストを指しています。ダニエル書においては、この万軍の長はまた人の子、メシア、王、祭司です(ダニ7:13、9:25、12:1)。彼はダニエル7章ではおもに王として描かれていますが、同8:11では天の聖所で奉仕されるお方として描かれています。ダニエル8章は、小さな角が人間としてのキリストではなく、天の聖所の大祭司としてのキリストご自身を攻撃している光景を描いています。

NOTE

問3 小さい角は何を廃そうとしていますか。ダニ8:12

小さな角は天の聖所における「日ごとの」あるいは「継続的な」(ヘブライ語で“ターミド”)キリストの務めを支配しようとした。多くの翻訳者は“ターミド”を「継続的な犠牲」と訳していますが、原語には「犠牲」という言葉はありません。聖所の務めにおいて“ターミド”は祭司の日ごとの務めと種々の働きと関係がありました。それは日ごとの、あるいは継続的な犠牲(出エ29:42)、臨在のパン(25:30)、香りの献げ物(30:8)、祭壇の上の火(レビ6:6、口語訳6:13)との関連において用いられています。地上の幕屋における祭司の日ごとの務めは、天の聖所におけるキリストの日ごとの執り成しの働きの型でした。小さな角が非難・攻撃するのは、祭司としてのキリストのこの働きにほかなりません。

多くのクリスチャンは天の聖所におけるキリストの務めに目を向けません。キリストの天の務めが小さい角の攻撃の対象となるのはなぜでしょうか。どんな意味があると思いますか。

NOTE

問4 小さい角は日毎の供え物、聖所、真理をどうしようとしませんか。ダニ8:11、12

多神教のローマ帝国はイエスを十字架で殺害しましたが(ダニ11:22) 教皇制ローマは別の角度からイエスを攻撃します。それは天における大祭司としてのイエスの働きを妨害することでした。地上の宗教・政治的な権力である小さな角はどのようにして天におけるキリストとその働きを攻撃するのでしょうか。

(1)「その聖所の場所を覆した(新改訂標準訳)」 字義的に訳すと、「その聖所の場所が覆された」となります。場所とは聖所の基礎のことで、比喩的に聖所の本質と目的を表します。「覆す」という動詞は捨てる、拒む、放棄するという意味です(列王下7:15参照)。小さな角は、キリストの祭司としての働きを乱用することによって、仲保と赦しの場所である天の聖所の基礎を覆すのです。

(2)軍勢は日ごとのものにとって代わる ダニエル8:12は、「軍勢は不義/反逆によって継続的なものにとって代わった」と訳すことができます。「取って代わった」という動詞はしばしば「だれかに代わる」を意味します(ダニ11:21参照)。したがって、この聖句の意味は、「小さな」角がキリストの日ごとの務めを乱用したということ、「小さな」角自身の軍勢が聖所を支配し、つかさどるように「取って代わった」ということです。これは、偽りの宗教制度が聖書の制度に取って代わったことを示し、神と真理に対する恐るべき反逆です。

(3)真理を地になげうった 天の聖所におけるキリストの務めに関する真理(救いの計画を含む)は、この宗教・政治的権力によって無にされました。この権力は神の律法を変えようとする権力(ダニ7:25)と同じです。

ダニエル8:13にある質問はダニエル8章に記されている一連の出来事の終わりに関するものです。文字通りに訳すと「……荒廃をもたらす幻、日ごとのもの、また反逆はいつまでですか」となります。幻とはダニエル8:1~14に記された幻、つまりメド・ペルシアとギリシア、日ごとのもの、万軍の長の働き(11節)、小さな角の反逆または攻撃(12節)を含む幻のことです。質問は幻全体の期間を問うています。

木曜日 「2300の夕と朝の間」(ダニ8:14、口語訳)

4月25日

問5 「夕と朝」は何を意味しますか。創世1:8、13、レビ24:2、3

NOTE

「2300の夕と朝の間」という表現は、雄羊、雄山羊、小さな角についての幻が実現する期間を定めており、キリストの日ごとの務めと働きに対する小さな角の攻撃が含まれます。この預言的期間の終わりに重要な事件が起こるわけで、聖所が清められ(擁護され/回復され)ます。ダニエル8章ではこの期間の始まる日時を明示しておらず、9章に書かれています。

幻の始まり

幻の終わり

幻の始まり		2300日	幻の終わり	
メディア・ペルシア	ギリシア	ローマ	日ごとのも	聖所の清め
の間に始まる			の、反逆	の始まり

ダニエル8:10は天の聖所におけるイエスの日ごとの務めについて記しています。同8:14は贖罪日と呼ばれる年ごとの務めに言及しています(レビ16章)。ダニエル8章には、大祭司としてのキリストの日ごとと年ごとの両方の奉仕が記されています。

聖所の日ごとの務めで、イスラエル人の罪は象徴的に清められました。それはその年のためだけでした。ダニエル8:14によれば、キリストは2300年の後に罪の問題を1年のためだけでなく永遠にわたって終わらせる働きを開始されることになっていました。

問6 小さな角の最終的な運命はどうなりますか。ダニ8:25

贖罪の日に神は悪に勝利され、清く、力強い神としてのご自身を啓示されました。贖罪日には民全体が1年間の罪と汚れから最終的に清められました。それによって彼らは神の臨在にとどまることが可能となるのでした。この日はまた裁きの日でもありました。ダニエルは8章において、地上の予型によって象徴されるこれらの出来事が宇宙的な規模で完成し、悪が最終的に宇宙から根絶される時を待ち望んでいます。

NOTE

神はその民に地上の王国が次々と興ること、彼の民が迫害されること、小さい角が人々の心を天の聖所におけるキリストの働きから離すように努力することをお示しになったのでした。

もっと深く学びたい方へ

ローマ・カトリック教会は天の聖所におけるキリストの働きをさまざまな方法で妨害しました。たとえば

(1) 聖餐用のパンとぶどう酒はキリストの犠牲 それによって「十字架の祭壇上でひとたび血の様でご自身を捧げられた同じキリストが、血でない様で包まれ、捧げられるのである」(『カトリック教会教義問答集』381ページ、1997年)

(2) 罪の赦しはキリストの働きだけによらない「彼〔キリスト〕は免罪力の行使を使徒職にゆだねられた(同402ページ)。「洗礼を受けた者たちが神および教会と和解するのは悔悛(告解)の秘跡による」(同278ページ)。

(3) 司祭に対する罪の告白「司祭への告白は悔悛の秘跡に欠かせないものである」(同405ページ)。

(4) キリストだけに与えられた仲保者としての役割が不明瞭
マリアは、「教会では弁護者、補助者、恩人、仲保者の名で呼ばれるのである」(同275ページ)。

(5) 煉獄はキリストの働きに影を投げかける 完全に清められていないクリスチャンは死後、「天国の喜びに入るために必要な清めを成し遂げるため〔煉獄において〕清めを経験する」(同28ページ)。

ローマ教会は“キリストより教会が権威を受けた”との信仰に立っています。教会が聖書を制定し、罪を赦し、十字架の秘跡(ミサ)を行い、宣教の任務を受け、7つの秘跡を見えない神の命と恵みを信者に与えると理解しています。

「忠誠を保とうとする人々は、司祭服にかくれて教会のなかに導入された欺瞞と憎むべきこととに対抗して、必死に戦わねばならなかった。聖書は、信仰の規準として受け入れられなかった」(『各時代の争闘』上巻38ページ)。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

ローマ・カトリックについてのSDA教会の声明が『アドベンチスト・ライフ』1997年6月号に載っています。ぜひご一読ください。かつて教会が語り、教え、書いてきたカトリックについてのコメントとは大きな差が見られます。要約しますと、

SDAは宗教的信条に関係なく、ローマ・カトリック教会を含めて世にキリストを掲げるために働くすべての教会と人々に協調する。

SDAは他教派に積極的に接近する。教会の務めは他教派の欠点を指摘することではなく、キリストの福音を伝えることにある。

SDAは聖書の中の多くの教えを他教派とも共有している。

SDAがカトリックについて語るとき、過去の事実と現在、将来とを混同しない。カトリック教会が歴史において国家権力を用いて不寛容、迫害してきたことを無視することはできないし、教皇首位権、聖書以外の教えについては了解しない。

SDAは終わりの日に第7日安息日が論争点となると考える。

SDAを含めてプロテスタントの側でも偏見と頑迷の精神を表したことを認める。SDAが聖書を教えることにおいて愛を表していないとすれば、正しくキリスト教を伝えていないことになる。

SDAは人に対して公平な対応を望み、多くのカトリック教徒が主にあって兄弟姉妹であるとの確信を強調する。

『キリスト新聞』(1996年9月14日)は米国SDAがカトリック教会を「黙示録の獣」と表現した本を出版したことを取り上げ、プロテスタント学者やカトリック関係者の言葉をあげて「典型的な反カトリックの偏狭」「非常識」などと現代の協調への姿勢への反動とコメントしました。

「法王は反キリスト」という巨大看板が米国ポートランド市のあちこちに現れました。広告主は「セブンスデー・アドベンチスト残りの民」という単立教会ですが、同地のカトリック司教は信徒たちに「誤って導かれている人たちのために祈りましょう。主の教えは“あなたの敵のために祈れ”です」と文書を送りました(『レビュー』1998年3月19日号)。

福音を伝えるべきキリストの教会として、一部に見られるこうした動きをどう考えるべきでしょうか。日本での宣教使命を負っている私たちは何を語り、教え、伝えることが第一責務と思いますか。



ダニエル書 9 章 (メシアの来臨)

● 暗唱聖句 ●

「彼が刺し貫かれたのは / わたしたちの背きのためであり / 彼が打ち砕かれたのは / わたしたちの咎^{とが}のためであった。 / 彼の受けた懲らしめによって / わたしたちに平和が与えられ / 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」
(イザヤ書 53 : 5、新共同訳)

「しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」
(イザヤ書 53 : 5、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月27日

最も美しく、最も力強い執り成しの祈りの一つがダニエル9章に見られます。年老いたダニエルはここで、何十年にも及ぶ捕囚の後にイスラエルが回復されるように神に熱心に嘆願しています。各節はダニエル自身の罪と「わたしの民イスラエルの罪」(ダニ9:20)の告白になっています。ダニエルの祈りは神の恵みと憐れみの必要をよく表しています。聖なる神と罪深い人間との間の隔たりはただメシアによってのみ埋めることができます。彼は人となられた神であり、人間と神とを隔てる罪の淵に橋を架けることのできるただひとりのお方でした。

ダニエル9章が旧約聖書の中で最も力強いメシア到来の預言をもって終わっているのはそのためです。ダニエルはイスラエルの政治的、物理的回復を願っていましたが、この預言は罪深い人間を聖にして罪のない神に回復するお方の来臨について述べています。この章の中に私たちはイエスを見ます。イエスのあがないの御業は彼が人となられる500年以上も前に預言されていました。

日曜日

ダニエルの祈り

問1 ダニエルの祈りの動機、祈りの性質、祈りの背景を調べましょう。ダニ9:1~3

赦しを求める公同の祈りの中では、預言者は仲介者としての役割を果たし、しばしば自分自身を民と同一視しています。大別すると、ダニエルの祈りは神への賛美と告白(ダニ9:4~11)、刑罰が正当なものであるという認識(11~14節)、神がエルサレムから民を赦してくださるようという嘆願(15~19節)からなっています。

問2 ダニエルは民に代わり、どんな特殊な罪を告白しましたか。ダニ9:5、6、11

1. _____
2. _____
3. _____

赦しを求める嘆願には神の偉大さをたたえる言葉が続いています。神は偉大で、畏るべきお方、正しく、憐れみと赦しに富むお方(ダニ9:4~7、9)、またご自分の民と結ばれた契約に忠実なお方という点です。それゆえに、ダニエルは喜んで恵みの御座に近づき、赦しを求めることができました。罪人が告白と悔い改めに導かれるのはキリストにおいて完全に現された神の慈愛のゆえです。ダニエルの願いは自分自身や人間的な行いではなく、ただ墮落した人間に対する神の愛と恵みにあることをこの祈りは教えています。

この祈りの終わりに、天使ガブリエルがダニエルに現れて説明します。祈りのどこにもダニエル自身、説明を求めています。それにもかかわらず、彼の祈りにこたえてガブリエルがやって来て、ダニエルに説明しています。ガブリエルは何について説明したでしょうか。

ダニエルの祈り全体を読んでください。彼の祈りに表された原則はどんな意味で、今日の私たち個人にも、また教会にも当てはまるものですか。

NOTE

NOTE

問3 ガブリエルはダニエルに「理解させよう」として来たことを告げました。何についての理解でしょうか。捕囚のことでないのは確かです。ダニ9：26、27

ダニエルが最後に悟りを必要としたのは、ダニエル8：14の幻に関してでした。彼はダニエル8：26、27で、同14節にある2300の「夕と朝」(口語訳)についての幻を理解しなかったと言っています。今ガブリエルが特別にダニエルに悟りを与えるために訪れます(ダニ9：24～27)。

ヘブライ語によれば、ダニエル8章と9章のつながりが明らかになります。ダニエルは8章の「幻」に関して2種類のヘブライ語を用いています。ひとつは1節の「わたしダニエルは先にも幻〔ハゾーン〕を見た」、もうひとつは26節の「この夜と朝の幻〔マルエー〕……は真実だ」の2つです。

“ハゾーン”は幻全体を指していますが、“マルエー”は2300日だけを指しています。ダニエル8章で、ガブリエルはダニエルに2300日の“マルエー”を説明していません。ダニエルが理解できなかったのはそのためです(27節)。ところがダニエル9：23で、ガブリエルはダニエルのもとに戻り、8章で説明しなかった「幻」(マルエー)を彼に説明しています(それ以外の幻はすべて説明されていました)。ガブリエルは23節でダニエルに、「この幻〔マルエー〕を理解せよ」と言っています。どの“マルエー”でしょうか。明らかにダニエル8：14にある「夕と朝」(口語訳)の“マルエー”です。このように、ガブリエルはダニエルの心を2300日に向けさせています。

「この夜と朝の幻〔マルエー〕について / わたしの言うことは真実だ。……この幻〔マルエー〕にぼう然となり、理解できずにいた。……お前が嘆き祈り始めた時、御言葉が出されたので、それを告げに来た。お前は愛されている者なのだ。この御言葉を悟り、この幻〔マルエー〕を理解せよ」(ダニ8：26、27、9：23)。

ダニエル8章と9章の関係がわかるまでよく読んでください。これは私たちの信仰にとって非常に重要な部分です。自分自身が理解し、ほかの人に説明できるまでに理解してください。

火曜日

70 週

4月30日

「お前の民と聖なる都に対して70週が定められている〔または、切り取られている〕。それが過ぎると逆らいは終わり／罪は封じられ、不義は償^{うぐな}われる。とこしえの正義が到来し／幻と預言は封じられ／最も聖なる者に油が注がれる」(ダニ9:24)。

NOTE

イスラエルの民が回復されるようにというダニエルの祈りに答えて、天使ガブリエルは現れ、ダニエルの心を2300の夕と朝の“マルエー”(時に関する預言)に向けさせた後で、すぐにダニエルに時に関する別の預言を与えます。それが、イスラエルに「定められた」または「布告された」(新改訂標準訳)70週の預言です。

「定められた」または「布告された」と訳されている動詞“ハータク”は、ヘブライ語聖書のほかのどこにも出てきません。したがって、聖句の意味や用法をほかの聖句と比較することができません。しかしながら、同じ動詞がほかのヘブライ語資料に用いられています。それによれば、「定められた」や「布告された」も可能な訳ですが、この動詞は本来、切り取る、切り離すといった「分離すること」を意味します。

この動詞が「定める」と「切り取る」の両方を意味するとすれば、最良の訳はその前後関係によって決まります。ガブリエルは70週に言及する前に、ダニエルの心を2300の夕と朝に向けさせています。次に2300日という文脈において、70週が“ハータク”されていると言っています。「切り取られた」という基本的な意味の方が「定められた」よりもぴったりします。より短い時の預言である70週が、ダニエル8:14の2300日という、より長い時の預言から「切り取られた」のでした。ガブリエルは「定める」という動詞を知っていながら、ここではあえてそれを用いていません。それを用いるのは数節後になってからです(ダニ9:26、口語訳参照)。

このように、70週が何を意味するにしても、それが前章の2300日というより長い時の預言から「切り取られた」ことは確かです。

70週の預言を注意深く読み、そこに福音がどのように説かれているか考えてください。70週の預言も2300の預言もキリストの贖いに深く関連していると考えてください。

NOTE

ダニエル9章の70週の預言の意味は、ほかのどの聖句よりも難解です。聖句を理解するにあたって次の点に留意しましょう。

(1) 最初に宣言されているのは62週と7週(69週)の後にメシアが来られるということです(ダニ9:25)。メシアは油注がれた者として69週の終わりにその働きを開始されます(マコ1:9~11)。

(2) 70週の間には何が起こるかは明らかにされていませんが、前後関係からエルサレムが再建されることがわかります(ダニ9:25)。

(3) ダニエル9:26によれば、「62週(と7週)のあと」で油注がれた者は殺され、彼を助ける者はだれもいません。このことは70週の最後の週に起こります。それは明らかに十字架におけるキリストの犠牲の死を指しています。

(4) 最後の週に、メシアはまた「多くの者と契約を批准^{ひじゅん}し」ます(27節、新欽定訳)。より良い訳は、「彼は強い契約を結ぶ」です。これはキリストの血によって固く結ばれた新しい契約を指し(ルカ22:20)、キリストに対する信仰によってその祝福にあずかるユダヤ人と異邦人の双方を含みます。

(5) 70週目の半ばに、旧約聖書の犠牲制度は終了します(ダニ9:27)。「半」と訳されているヘブライ語〔ハツィ〕は「半分」ではなく「中間」の意味です。キリストの犠牲の死はイスラエルの犠牲制度を終わらせました(マコ15:37、38、ヘブ10:8~10)。

(6) ローマ軍によるエルサレムの破滅は70週の間には起こると明言されてはいませんが、この預言の中に予告されています。将来起こるように定められていますが、いつかは明らかにされていません(ダニ9:26)。エルサレムの運命はイエスによってその働きの中に定められ(マタ24:1、2)、約40年後に現実となりました。

(7) 70週はペルシア時代からメシアの到来までの歴史的期間ですから、この預言的期間は文字通りの490年(490日でなく)を表します(1週を7日として70週は預言的な490日=490年)。

回復を求めるダニエルの祈りがこの驚くべき預言の先に来ているのは興味深いことです。あなたはメシア、油注がれたお方によって個人的に与えられている回復と赦しをどのように理解しますか。あなたのために捧げられたキリストの死について瞑想してください。

木曜日

70週の年代

5月2日

70週の預言の起算点となるのは、ダニエル9：25によるとエルサレムの復興と再建を正式に認可する布告の時です。

エズラは紀元前537年にキュロス王によって与えられた神殿再建命令に言及し（エズ1：1～4）、紀元前520年にダレイオス王によって再確認されています（6：1～12）。しかし町の再建が含まれていません。もう一つの布告は紀元前457年にアルタクセルクセス王によって出されたもので、エルサレムの復興と再建を認可しています（エズ4：7～23、7：12～26）。この布告はユダヤ人に自らの法律によってユダの地を治めることを許可するもので（7：25、26）預言に与えられた条件を満たす唯一の布告です。

NOTE

問4 下記の説明を読みながらチャートを研究してください。



(1) 紀元前457年、アルタクセルクセス王が布告を出す。49年（預言的7週）後、エルサレムが再建される（前408）。紀元27年（69週目）、キリストが油注がれ、紀元31年（7週目の半ば）、死ぬ。紀元34年（70週の預言の終わり）ステパノが殉教し、この時点から福音が異邦人にも伝えられる。

(2) 70週（490年）は2300年の一部であるため、紀元前457年は2300年預言の起点となる。2300年は紀元1844年に終わる。この年、天の聖所の清めが始まる（ダニ8：14）。

(3) ダニエル7：25、26によれば、再臨前審判は紀元1798年の後のある時点で始まる。

NOTE

70週の預言は2300の朝夕の預言と関連しています。どちらも前457年という共通の起算点で始まります。2300年の預言は1844年に終わり、キリストは大祭司としての最後の奉仕である天の聖所の清めに入りました。

もっと深く学びたい方へ

『国と指導者』下巻279～304ページ(救い主を待望する人々) マーヴィン・マックスウェル『神の思いやり』(英文)第1巻195～265ページ、『SDA聖書注解』(英文)第3巻94～107ページ、同第4巻847～855ページを読みましょう。

【アルタクセルクセス王の第7年】古い資料が発見されるまでは、アルタクセルクセス王の第7年という年代には疑問がありました。しかし、バビロニアの天文に関する文書やエジプトのエレファンティン島で見つかったパピルス文書によって、アルタクセルクセス王の実質的な第1年が紀元前464年であることが確定されました。したがって、彼の第7年は紀元前457年ということになります。

多くの歴史家がアルタクセルクセス王の第7年を紀元前458年とするのはペルシア暦(春から春)を用いるからです。しかし聖書と歴史によれば、ユダヤ人は秋から秋の暦を用いており、それによると第7年は紀元前457年になります(ネヘ1:1,2:1)。この年代は信頼できる証拠によって裏づけられたものです。

ダニエル9:24によると、70週の間「最も聖なる者に油が注がれる」とありますが、これは何を意味するのでしょうか。

キリストの初臨の時期が予告されていました。当時の人々はどのようにこの預言を理解したのでしょうか。神の民が来臨の備えができていなかったとすれば、終末に生きる私たちへの教訓があるように思います。

「油注がれた者は不当に断たれ」(ダニ9:26)を瞑想しましょう。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

【ダニエル9章の意味】

いろいろな見方があると思いますが、ダニエルの預言のメイン・ラインはダニエル時代のバビロン捕囚に始まり、ペルシアによる自治権の限定回復、ギリシアの圧制、ローマ帝国による属州というユダヤ民族の運命を列記し、特に9章において救い主メシアの出現に焦点を向けていたのではないのでしょうか。

創世記3:15で神はアダムとエバに「女の子孫」、つまり受肉して、人として来たりたもう神のみ子の約束を与えました。やがて前7世紀にイザヤは「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれる」と預言して、神の子が赤ちゃんとして世に生まれることを示し、同じころミカはベツレヘムを誕生の地と指定し(ミカ5:1)、そして前6世紀にダニエルは初臨の時期を予告したのです。こうして窮地にあったユダヤ民族は徐々にメシア来臨の希望を持ちました。事実、キリスト降誕直前に、ユダヤの学者たちは近くメシアが誕生するとの確証を聖書のうちに調べ、そのしるしを見て正確に預言を悟っていたと思われます。このことはヘロデ王自身が側近の学者たちからメシア出現の成就を聞いていたことでもわかります。マタイ2:4、7にはこう書いてあります。「(ヘロデ)王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。」「そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた」。

【ペルシア帝国】

バビロンに続いてユダヤを支配したペルシア帝国は政策として被征服民族に自治権を与え、それぞれの宗教を尊重し、その習慣持続を許しました。ユダヤ人のネヘミアやモルデカイが役人として登用されたのも、ユダヤ人にエルサレム帰還、神殿再建を許可したのも、こうした一連の融和政策によるものでした。当時のユダヤ人はペルシア国内で比較的安定した生活をし、商売や事業に成功したおかげで、ペルシア領内に残留することを選ぶ人たちも多くありました。キュロス王はユダヤ人に故国帰還を許し、ダリウス1世は神殿再建を許可し、クセルクセス1世はエステルを愛し、アルタクセルクセス1世はネヘミアにエルサレム再建を認可しています(エズ7:7、前457年で70週の預言の起算点)。



第6課

5月11日

終末論的贖罪日^{しょくざい}

● 暗唱聖句 ●

「このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません」

(ヘブライ9:23、新共同訳)

「このように、天にあるもののひな型は、これらのものできよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけにえで、きよめられねばならない」

(ヘブル9:23、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月4日

ダニエル書のすべての幻は悪の勢力に対する神の勝利によって完成します。ダニエル2章は、神の王国が最終的に確立される時に来る勝利に満ちた結末を描いています。7章は裁きの業が神の国に先行することを啓示しています。その中で人の子が父なる神のみもとに来る姿が描かれています(13節)。8章は天の聖所における人の子の祭司としての働きを強調しています。9章ではメシアの犠牲の死が強調されています。すべての場面で人の子イエスは私たちの救いの中心です。

聖書はキリストの二つの重要な働きを強調しています。一つは私たちの罪のための身代りの犠牲、もう一つは天の聖所における私たちの大祭司としての働きです。キリストの祭司としての働きは聖所の奉仕に描かれており、救いの全計画が聖所の中で象徴と予型によって表されています。

天におけるキリストの執り成しの働きはすべてのクリスチャンが理解すべき重要なテーマです。キリストが私たちの犠牲また大祭司として何をし、また何をしておられるかを学びましょう。

日曜日

地上の聖所と天の聖所

5月5日

「この祭司たちは、天にあるものの写しであり影であるものに仕えており、そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、『見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ』と言われたのです」(ヘブ8:5)。

NOTE

問1 モーセが建てるように命じられた地上の聖所は何をモデルとしたのでしょうか。出エ25:8、9、詩11:4、ヘブ8:2、黙示15:5

ある意味で、地上の聖所がイスラエルの民に対して持っていた機能は天の聖所が宇宙に対して持っている機能と同じです。

第1に、どちらの聖所も神がご自分の民のうちに住まれる場所です。神はモーセに次のように言われました。「わたしのための聖なる所を彼らに造らせなさい。わたしは彼らの中に住むであろう」(出エ25:8)。一方、天の聖所は神が被造物のうちに臨在され、御座を置かれるところです(詩11:4、ダニ7:9、10、黙示4:2~7)。

第2に、どちらの聖所も神と神の民が会う場所です。地上の聖所において神はイスラエルの民と会い、民は神を礼拝しました(出エ29:42~45、詩43:3、4)。天の聖所は、神が天の住民と会う場所です。彼らはそこで神に仕え、神を賛美します(ヨブ1:6、詩103:19~22)。

第3に、神は両方の聖所から王として支配されます。「主はケルビムの間に御座を置き……支配される」(詩99:1、新国際訳)。「主は天に御座を固く据え/主権をもってすべてを統治される」(詩103:19)。

ヘブライ10:19、20、9:11、12などを調べると、イエスが昇天後に私たちが神に近づく道を「開いて/備えて/開始して」くださったことが暗示されています。これらの聖句は、キリストが昇天後に天の聖所において祭司としての働きを開始されたことを教えています。ダニエル9:24はこの就任、あるいは油注ぎ(出エ40:9~11)を70週という期間の中に置いています。

イエスは天であなたのために奉仕しておられます。このことはどんな慰めを与えてくれますか。

NOTE

ヘブライ5:1には大祭司の大事な仕事がかかれていいます。イスラエルの民の中で祭司は神の前に民を代表し、民の前に神を代表しました。仲保者としての役割を果たしていたのです。彼らは日ごとの務めとしてイスラエルのために犠牲を捧げました。「悔い改めた罪人は供え物を幕屋の戸口にたずさえ、このいけにえに手を置いて罪を告白し、こうして象徴的にその罪を彼自身から無垢の犠牲の上に移し変えた。……祭司は、血を聖所に運んで、この罪人の犯した律法を入れた箱の前方にたれていたりばりの前に注いだ。この儀式によって、罪は血によって象徴的に聖所に移された(『人類のあけぼの』上巻418ページ)。神はあがないの奉仕を経て、罪人の罪の責任を自ら負い、悔い改めた罪人をお赦しになりました。

キリスト(ヘブ7:27、8:1、2)は大祭司であると同時に、ご自身が犠牲の小羊、“世の罪を取り除く神の小羊”でした(ヨハ1:29)。彼は多くの人の身代金としてご自分の命と血を献げるために来られました(マコ10:45)。罪と何のかかわりもない方が私たちのために罪となり(コリ5:21)、「わたしたちのために呪いの^{のろ}となつて、わたしたちを律法の呪いから贖^{あがな}い出してくださいました」(ガラ3:13)。

問2 昇天されたイエスは聖所で何をしておられますか。ヘブ7:25、ロマ8:34

キリストのあがないの自己犠牲において、神は私たちの罪を負われました。キリストは天の聖所において、赦しを求めて神に近づく人たちに御自身の犠牲の恵みを与えられます。キリストは、〔地上の聖所の〕日ごとの務めが象徴によって教えていたものを、天の聖所において実際に執り行っておられます。すなわち、キリストは私たちの大祭司として絶えず私たちのために神の赦しを求め(エフェ4:32) 私たちを罪から清め(1ヨハ1:9) 私たちが神に近づくことができるようにしておられます(エフェ2:18)。

ペニーは主を愛し、正しく生きたいと思っているのですが、ときどき罪に陥ることがあります。ペニーのためにイエスは天で執り成しておられることをどのように話したらいいでしょう。

火曜日

贖罪日(その1)

5月7日

「なぜなら、この日にあなたたちを清めるために贖いの儀式が行われ、あなたたちのすべての罪責が主の御前に清められるからである」(レビ16:30)(ヘブ9:23参照)

NOTE

民の罪は象徴的に犠牲制度によって聖所に移されましたが、贖罪日には聖所に蓄積された罪と汚れを清め、レビ記によれば同時に民も清められることになっていました。この儀式が終わると民と聖所はともに罪から清められました。この日が終わるとヘブライ人には天との平和がありました(『各時代の希望』中巻226、227ページ参照)。

問3 地上の聖所の清めはさらなる天の聖所の清めを意味します。ヘブライ9:23を読んでください。

聖書は、天にあるものが清められねばならないと書かれています。天にあるものがなぜ清められねばならないのでしょうか。これを理解するためには、地上の務め全体が天の務めの影・型であったことを覚える必要があります(ヘブ8:1~5)。地上の聖所が罪によって汚されたのと同様に、天の聖所も罪によって汚されます。そこでヘブライ9:23は天の聖所も清められる必要があると述べているのです。祭司を除いて罪人は聖所に入ることができませんでした。それと全く同様に、罪人が直接天の聖所に入ることはありえません。とすれば、天の聖所は罪以外の何から清められる必要があるというのでしょうか。

ヘブライ9:23は贖罪日について言及していますが、聖句はこの清めがイエスの昇天直後に起きたと書いていません。むしろ救いの歴史のある時点で、天にあるもの自体が清められる必要があったということです。キリストは天の聖所で執り成しの働きをなされました(黙示8:3,4)。同じ黙示録はキリストが至聖所で特別な働きをしておられるとも教えています。この特殊な働きは至聖所が開かれる黙示録11:19で始まり、至聖所が閉じられる黙示録15:8で終わっています。

私たちが今、大いなる^{あがな}贖いの日に生きているということは何を意味しますか。そのことを恐れるべきですか。喜ぶべきですか。

NOTE

「彼は続けた。『日が暮れ、夜の明けること2300回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る』」(ダニ8:14)。

「このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません」(ヘブ9:23)。

問4 二つの聖句はどのように関連づけるべきでしょうか。

2300年の終わり(1844年)に天の聖所は清められることになっていました。ここで用いられている「清められて」(ニツダック)という言葉は、ふつう「回復されて、擁護されて」を意味しますが、基本的には不当に告発された人の権利を回復するという意味です。詩編7:9(口語訳7:8)9:5(口語訳9:4)では、これと同じ言葉がそれぞれ「正しい」(義)、^{まっとう}「正しく」と訳されています。

この言葉はまた救いと同意語です(イザ1:27)。聖所に関連して用いられた場合、それは清めを意味し、「清浄」と同意語です(ヨブ4:17参照)。罪人の回復・擁護は清めによってなされます(イザ53:11)。したがって、この言葉には法的な意味での救いの思想と清めの思想が一つに組み合わされています。ダニエル8:14で用いられているのはそのためです。主はこの言葉の持つ広くて深い意味を伝えようとされたのです。

《ダニエル書7章》	《ダニエル書8章》
バビロン	
メド・ペルシア	メド・ペルシア
ギリシア	ギリシア
ローマ(帝国/教皇制)	ローマ(帝国/教皇制)
天における裁き	聖所の清め
神の王国	神の王国

上の表によって、ダニエル7章と8章の共通点を学び、7章における裁きの光景と8章における聖所の清めとが対応している点に注目してください。裁きと聖所の清めは神の民にとって福音でしょうか。

木曜日

終末論的贖罪日の意味

5月9日

問5 贖罪日における主の雄山羊とアザゼルの雄山羊にはどんな目的がありましたか。レビ16:7～10、15～22

アザゼルが人格的な存在者であることは「主のもの」、「アザゼルのもの」と対比して書かれていることから明らかです(レビ16:8)。この名は「強い神」という意味で、ここでは悪魔的な存在者を意味しています。罪は主の雄山羊の血によって聖所から除去されました。ひとたびあがないが終わると、生きた雄山羊は罪をアザゼルのもとへ、つまり彼の象徴的な住み家である荒野へ携えて行きました。こうした罪を除去する儀式を通して、罪と汚れはその創始者であり扇動者であるアザゼルのもとに返され、彼の責任下に置かれました。主は犠牲制度によってご自分の民の罪の責任を負われましたが、罪の創始者ではありませんでした。この罪は最終的には主のもとから取り除かれねばなりませんでした。

問6 アザゼルの雄山羊の追放と千年期の悪魔の状態、贖罪日の清めと新天地の状態とは関連しています。次の聖句を読んでください。黙示20:1～3、9、10、12～15、21:1～5

贖罪日はキリストによる神の救いの御業に関していくつかの側面を強調しています。

(1) 贖罪日は天の聖所におけるキリストの働きの最後の局面を示しています。私たちを最後の戦いに備えさせるために、黙示預言は裁きと清めの始まる正確な時を教えてください。

(2) 贖罪日は罪の根絶を示しています。天の聖所におけるキリストの働きは、(1)キリストが間もなく再臨されること(ヘブ9:28)、(2)真のアザゼルの正体が明らかになること(荒廃した地上の荒野に千年間つながれる〔黙示20:1～3〕)、(3)罪が根絶されること、(4)この世界が再創造されること(黙示21:1～5)を宣言しています。

(3) 贖罪日に裁きと清めが行われることは、神が宇宙の道徳的審判者であることをあかしします。すべての人が神に対して責任を負わねばなりません。キリストに対して忠誠を守る人たちは、裁きにおいて勝利し、その罪の記録は宇宙から永遠に除去されます。

NOTE

NOTE

ヘブライ人への手紙は旧約時代のイスラエルの聖所とその働きを挙げて、救済史における中心人物が大祭司イエス・キリストであることを強調しています。

もっと深く学びたい方へ

『主よ、み国を！』第5章“聖所の教理とその意味”をお読みください。SDAの聖所についての理解が詳細に書かれています。『各時代の大争闘』下巻119～150ページ（聖所とは何か、天の至聖所における大事件）『アドベンチストの信仰』547～572ページ（天の聖所におけるキリストの奉仕）を読みましょう。

（1）天の聖所の性質 地上のいかなる建物も、その輝かしさと壮麗さにおいて天の聖所に及ぶものではありません（『各時代の争闘』下巻126ページ参照）。地上の聖所は天の聖所の型になって造られていたので、両者の間には基本的な構造に関して共通点がありました。地上の聖所には二つの部屋があったことから、天の聖所にも二つの部屋があることが推測されます。それ以上のことは憶測になります。天の聖所はいわば無限の神が被造物に近づくために有限なものと接触される場所でした。

（2）聖所の清めと小さな角 聖所に対する小さな角の攻撃は冒瀆とみなされました（ダニ11:31）。旧約聖書においては、聖所に対する反逆的な冒瀆は、あがないの血によってではなく罪人の死をもって取り除かれました。たとえば、バビロニア人は神殿を破壊し、これを汚しました（エゼ7:22、25:3）。この汚れはどのようにして除去されたのでしょうか。主は彼らを滅ぼし（エレ51:11）、神殿は後に再建されました。神殿を汚したイスラエル人は死に処せられました（エゼ23:39、46～49）。罪人の死を通して“あがないの清め”がなされたのでした（民数35:33参照）。小さな角は冒瀆者とみなされ、最後には滅ぼされます（ダニ8:25）。

聖所の教えは安息日、律法、義認などの他の教理にどのような光を与えますか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

【幕屋式聖所は救いの計画の実物教訓】

エジプトで奴隷生活を強いられたイスラエル人はカナンに入る前の砂漠の仮住まいの中、自分たちが得た最高の材料を使って“幕屋”を作りました。彼らは幕屋を真ん中において周りに自分たちの天幕を張り、生活したのでした。そこで祭司たちが毎日行う奉仕、特別な年中儀式、あるいは犠牲の捧げものの……すべてが宗教的実物教訓であり、信仰が生活と密着した形で維持されました。カナンに入国しても安定するまでの士師記、サムエル記の時代は転々と移動しましたが、幕屋のもっとも大切な“契約の箱”が民の拠りどころの役割を果たしました。

ソロモンがエルサレムのモリヤ山に造った神殿は後にバビロンによって破壊されましたが、またネヘミア、エズラ、ゼルバベルらが再建しました。ここが神の民の宗教的信仰と統一の象徴となったのです。パレスチナから遠く離れた地に居住した民は家族とともに年に数度は神殿への旅を計画し、神を礼拝しては信仰を新たにできる機会としました。聖書を持たない時代の神の民はそこに贖罪の計画の要約を見ていたのです。すべては民に神の救いを象徴して教えました。大事なテーマは二つ、自分の罪の深さを実感させること、救い主によるあがないに心を向けることでした。

【アドベンチストの先駆者たち】

19世紀の再臨信徒たちは熱心な聖書研究者たちでした。彼らはいつも聖書を調べ、そこに信仰の根拠を見だし、特に再臨切迫観の中で預言を研究しました。ダニエル書にも黙示録にも神の聖所の記述があります。彼らはこれを見逃しませんでした。ヘブライ人への手紙は多くの部分を聖所とその奉仕について説明しています。こうした組織的な研究の中で先駆者たちは壮大な救済史的テーマを“発見”したのです。それがキリストの十字架を宇宙的な視点から見る「各時代の争闘」（日本名）で、英文原題は「キリストとサタンとの争闘」（1858年）です。このユニークな立場から学ぶ十字架のメッセージはセブンスデー・アドベンチスト教会の特徴的な教理体系を生んだのでした。

1858年、H・L・ヘースティングスなる人物が『神と人との間の争闘』を出版していますが、エレン・ホワイトは「キリストとサタンとの間の...」としました（『ミニストリー誌』1982年6月号13ページ）。「神と人との」でないことを感謝します。神と人が互いに敵として戦っているのではなく、私たちのためにキリストが罪と戦い、勝利されたのです。



第7課

5月18日

マタイ 24 章

(黙示預言に関するイエスの説教)

● 暗唱聖句 ●

「そのとき、人の子の^{しるし}徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る」
(マタイ 24 : 30、新共同訳)

「そのとき、人の子の^{しるし}が天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう
(マタイ 24 : 30、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月11日

マタイ24章はキリストの生涯に関して最も議論になる部分の一つです。イエスはここで再臨の前に起こる出来事のあらましを述べておられます。それは質問を切り出した弟子たちの時代以降、多くの人々の関心を引きつけてきた話題です。イエスはまず弟子たちの時代に起こる出来事をまず予告し、続けて暗黒時代と呼ばれる中世を経て、栄光に満ちた再臨に言及しておられます。

イエスがダニエル7章の第4の王国、多神教ローマ帝国から始めておられるのは興味深いことです。当時世界を支配していた国がローマだったからでしょう。次に、中世(ダニエル7章に預言的に描かれている1260年間)における患難と恐怖の時代(マタ24:21)、さらに「患難の時」が終わったことを示す兆候が続く(29節)、最後に、終末時代の惑わし(24~27節)と栄光に満ちた主の再臨をもって結ばれています(30,31節)。

イエスのお話は当時の政治情勢から始まって歴史をたどり、ご自分の再臨をもって終わっています。まさに歴史的解釈の立場に立った見方と言えないでしょうか(第1課参照)。

日曜日

イエスと民の将来

5月12日

問1 マタイ 24 : 1 ~ 3 を読み、終末に関してイエスが語られたときの背景を考えてください。いつ、どこで、何を、誰に語られましたか。一つひとつが終わりの時のしるしに適合する内容と思いませんか。

NOTE

この講話の直接の主題はエルサレム滅亡ですが、実際にはもっと大事なキリスト再臨と世の終わりのしるしについて述べています。エルサレムの滅亡はここでは再臨前の世界を象徴しています。また3節にある弟子たちの質問から、彼らがキリストの死なれる前からある程度キリストが再臨されることを知っていたことがわかります。

問2 弟子たちの主要な関心は何にありましたか。マタ 24 : 3

弟子たちはイエスに3つの質問をし、イエスはそれらに基づいて黙示的な言葉を語っておられます。

第1の質問は「そのこと〔神殿の崩壊〕はいつ起こるのですか」で、それに対してイエスはマタイ 24 : 15 ~ 20 で答えておられます。第2の質問は「あなたが来られ〔る〕……ときには、どんな^{しるし}があるのですか」で、それについて21 ~ 31 節で答えておられます。第3の質問は「世の終わるときには、どんな^{しるし}があるのですか」で、それに対して4 ~ 14 節で答えておられます。つまり、イエスはまず最後の質問（世の終わり）に答えることによって話を切り出し、次に最初の質問（エルサレムの滅亡）に戻り、最後に、最も重要な真ん中の質問（栄光に満ちたキリストの再臨）に答えておられます。明らかにイエスの最大の関心はエルサレムの滅亡ではなく、世の終わりと再臨にありました。講話の残りは再臨に備えるようにという訴えになっています。

「イエスをご自分のごらんになった通りに未来の諸事件を弟子たちに示されたら、彼らはその光景に耐えることができなかつたであろう。彼らに対する思いやりから、主は二つの大きな危機をまぜて描写し、その意味を弟子たちが自分で学ぶようにされた」（『各時代の希望』下巻92ページ）。ここに書かれている原則から私たちは終末を語る場合の注意事項について学ぶことができますか。

NOTE

マタイ 24 : 5 で、イエスは次のように言っておられます。「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう」。

この言葉はまさにその通りに実現してきました。歴史を通して今日に至るまで、多くの人々が自分をキリストであると主張してきました。2000 年前にイエスがオリーブ山で警告された通りです。

問3 宗教、社会、自然に見られる終わりのしるしを挙げてください。「メシアであるキリスト」と自称する者と聖書の真正さとをあなたはどのように考えますか。大事な終わりのしるしの一つである「福音が全世界に伝えられる」との預言の意味を考えましょう（マタ 24 : 14）。

これらの予告された出来事に関して、次の 2 点に留意する必要があります。第 1 に、それらは終わりのしるしではなく、むしろ神の民が終わりを待っている間に起こる出来事です（マタ 24 : 6, 8）。第 2 に、それらの出来事は主のしもべたちに対する霊的警告を含んでいます。イエスが偽りのメシアに言及されたのは、この危険について弟子たちに警告するためでした。一方、自然界の災害は多くの人の心に神と神の愛に対する疑いを生じさせるかもしれません。しかし、これらの災害に関するキリストの事前の警告はこうした疑いを和らげるものです。あらかじめ神ご自身によって警告されているからです。

イエスは弟子たちが直面するさまざまな試練や苦難について語っておられますが（迫害、偏見、背信、裏切り、憎しみなど）それらは signs（さまざまなしるし）であって、終わりの決定的な the sign（定冠詞のついた^{しるし}徴）ではありません（弟子たちがマタイ 24 : 3 で求めたのは徴 the sign でした）。「徴 the sign」となるのは、福音が全世界に宣べ伝えられることです。「それから、終わりが来る」（14 節）。

イエスが予告された出来事（戦争、^{ききん}飢饉、災害、病気など）を理由に、神を信じない人たちがいます。これらの出来事に関するイエスの警告は、実はこうした考えが誤りであることを教えています。

火曜日

エルサレムの滅亡(マタ24:1~20)

5月14日

問4 「(神殿が崩れるというのは)いつ起こるのですか」との質問に主はどうお答えになりましたか。マタ24:3、15

イエスはエルサレムの滅亡が予告されているダニエル9:27に言及しておられます。主は預言者としての権威をもって、ローマ軍による神殿の破壊とその荒廃という預言の成就を語っておられます。聖書に出てくる「憎むべきもの」という言葉は偶像崇拜とそれを行う人々を指しています。偶像崇拜者のローマ軍は神殿とエルサレムを荒廃させる、憎むべきものです(ルカ21:20)。

問5 エルサレム滅亡のときユダヤにいる弟子たちに、どのような特別な指示をお与えになりましたか。マタ24:16~18

イエスによるこの勧告は二つの面を強調しています。一つはローマ軍によるエルサレム攻撃がもたらす死と苦しみを避けて安全な場所に逃れる必要があるということ、もう一つは直ちに行動を起こす必要があるということです。持ち物を集める時間はありません。遅れることは命取りになります。

幸いにもイエスの弟子であった初期のキリスト教徒たちは主の勧告に従ったので、エルサレム攻撃の際に死んだ信者は一人もいませんでした(『各時代の希望』下巻95ページ参照)。行いと服従をもたらす信仰の良い例です。これらの人たちは行いによってでなく、ただキリストに対する信仰によって救われたのですが、「ローマ軍が近づいたらエルサレムを離れなさい」というキリストの命令に従うことによって自らの信仰を現しました。つまり、彼らは従ったゆえに、恐るべき滅びの苦痛から守られたのです。『各時代の大争闘』上巻第1章をお読みください。ローマ軍によるエルサレムの包囲、攻撃、陥落、滅亡の惨状、神殿の崩壊、クリスチャン・グループの奇跡的脱出などの記録が描写されています。

神への服従は苦難を免れさせてくれるというこの原則の例を身近に見たことがありますか。逆に、神に従ったゆえに苦難に遭った人の例を見たことがありますか。

NOTE

NOTE

問6 イエスが予告された「大きな苦難」というのを自分の言葉で説明してください。マタ24：21、22

イエスはエルサレムの滅亡から、ダニエル7：25に描かれた大いなる患難へと目を向けておられます。「長い暗黒の世紀、キリストの教会に血と涙と苦悩の見られる幾世紀が、キリストの目の前に開かれていた。弟子たちはその時このような光景を見るのに耐えられなかったので、イエスは短いことばを述べられただけでこの光景を通り抜けられた」(『各時代の希望』下巻96ページ)。

西洋の歴史におけるこの恐るべき期間に関して、二つの点に留意する必要があります。(1) 神はこの期間を限定されること(ダニエル7：25によると1260年の間)、(2) それは世界の歴史にもまれに見る苦難です。「1260年(日)におよぶ患難は歴史において最大のもので、何世紀にもわたって続き、しばしば非常に高い死亡率を出したのでした」(C・マーヴィン・マックスウェル『神の思いやり』第2巻35ページ)。

ダニエル7：25に述べられている患難は、同12：1、2にある患難とは異なります。12章の方は「再臨における復活に関連して起こるものです。それはダニエル7：9～14に描かれた裁きの法廷が種々の記録の調査を終えた後で起こります。それは悪人へのみ恐れを生じさせるもので、神の民は『皆』、それから救われます」(マックスウェル、34ページ)。

問7 もしサタンがすでに敗北しているなら、なぜそのような「大きな苦難」や暴虐があるのでしょうか。次の聖句は何らかの助けを与えてくれるものではありませんか。

ロマ16：20

黙示12：12

戦争、飢饉、悲劇などはなぜ起こるのでしょうか。善悪の大争闘を理解することは、それらに対処する上でどんな助けになりますか。

木曜日

再臨のしるし その2

5月16日

問8 キリスト再臨の決定的な徴the signの前にどのようなさまざまなしるし signs が起こりますか。マタ 24 : 29

NOTE

イエスは大きいなる患難の終了に関連して、一連の地球規模のしるしに言及しておられます。アドベンチストは1755年のリスボン地震、1780年5月19日の暗黒日、1833年11月13日の流星雨がそれであると受け取りました。これらの現象の起きた時期とその順序は預言の実現にふさわしいものでした。

1700年から1844年の間に一連の重要な預言的イベントが起こっていることは注目に値します。「その順序は次の通りです。(1)大地震 1755年 (2)暗黒日 1780年 (3)獣に対する裁き 1798年 (4)落星 1833年 (5)天における審判の開始 1844年」(ウィリアム・シェイ「歴史における宇宙的しるし」『ミニストリー』1999年2月)。主は明らかに私たちの関心を黙示預言の実現に向けておられました。

問9 マタイ 24 : 3 で弟子たちが尋ねた再臨と終末の徴に主は何と答えたでしょうか。マタ 24 : 30

「そのとき、人の子の徴が天に現れる」(マタ 24 : 30) というイエスの言葉の意味を知ることは困難です。この出来事の後、諸民族が嘆き、人の子が栄光のうちに現れます。聖書学者はこの徴の意味について推測してきましたが、満足できる解釈に至っていません。エレン・ホワイトは次のように述べています。「まもなく、東のほうに、人の手の半分くらいの大きさの小さい黒雲が現われる。それは、救い主を囲んでいる雲で、遠くからは、暗黒に包まれているように見える。神の民は、これが人の子のしるしであることを知っている」(『各時代の争闘』下巻 419 ページ)。

「人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」(マタ 24 : 31)。イエスはここで何を言っておられるのでしょうか。関連聖句を集めて解釈してみましょう。

NOTE

イエスの黙示的講話はダニエルの見た幻の内容にしたがっていますが、悪^まの欺瞞^{ごまか}への警告と信仰の持続への励ましに重点をおいています。主はエルサレムの滅亡から最後の教会に至るまでの間の欺瞞、終わりの徴、栄光の再臨へと弟子たちの心を導いたのでした。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の希望』下巻91～106ページ(オリブ山上で)、『各時代の大争闘』上巻1～27ページ(世界の運命の預言)を読みましょう。

今週の研究を締めくくるにあたって次の点に留意してください。

(1) 終わりのしるしの目的 イエスが一連の出来事について語られたのは、

第1に、私たちがそれを用いて再臨の日時を定めるためではありません。イエスがしるしを与え、語られたのは、私たちがそれによって再臨の約束をつねに心にとめるためでした。それらのしるしを見るごとに神の民はいつでも再臨を心にとめるのです。

第2に、それらのしるしは信者のうちに期待と希望を抱かせます。主が自分たちをお忘れになっておられない、歴史は神の定められた目標に向かって動いているという確信を与えます。

第3に、しるしは神の民を偽りから守ってくれます。サタンは彼らを欺こうとしますが、イエスは彼らに真理と偽りを識別する方法を教えておられます。

(2) この時代 マタイ24:34の「この時代」という言葉は、イエスに耳を傾けている人々、あるいは人々の種類「悪しき時代」、あるいは特定の民族を指します。この場合には後の二つが文脈にかなっています。

(3) 大きな苦難 マタイ24:20、21は、エルサレムの滅亡時に患難が起こるという印象を与えますが、ギリシア語原文にはそのような印象はありません。21節の初めにある「そのときには」という表現は、遠い将来における新しい出来事を指す場合に用いられることがあります。ここでは、エルサレム滅亡のずっと後に起こった出来事を指しています。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド▲

【世の終わりのしるし】 キリストの十字架による死から50日目、昇天の日から10日目のペンテコステの日、大群衆の前で聖霊を受けて説教したペトロはヨエルの言葉を引用しました（使徒2：12～21、ヨエ3：1～5参照）。彼は紀元31年の春のこのときを「終わりの時」と宣言し、そのしるしに“太陽や月の異変”を挙げて、聖霊降下こそ預言の成就、と述べました。ペトロはヨエルの預言を自分たちに当てはめて解釈しました。自然や社会にあらわれる現象は大小の差こそあれ、人間世界の歴史に生じることで、一時代に限定されることではありません。人の世は常に悪にみち、地震や飢饉、災害が襲い、人間世界の不安定さを教えています。19世紀の再臨運動を担った人々は聖書研究によって、特に年代に関する預言を調べて終末の近いことを実感し、このころに前後して起きた自然界の特異な現象をはじめ、社会、宗教、文化に見られるしるしなどを総合的に捉えて“世の終わり近し”と受け止め、リバイバル運動を展開、多くの人々がこれに応じて再臨信仰に入りました。個々の事件や出来事に意味をつけて決定的な終わりのしるしであるかのようにしないことを今週のガイドは教えています。

【備 え】 最初に書かれた聖書には章がありません。マタイ24章、25章は連続した文章で、主はまず24章で終わりの近いことを語り、日常的に備えをすることを後半から述べて、25章の部分で3つのたとえ話をもって、いついかなるときもその日のために備えをすることを勧めたのでした。大事なのは現象ではなく、明日でも、あるいは今日であってもよいように心を主にに向けて生きることです。

アッジシの聖フランシスはあるとき「今日の日没と同時に世の終わりが来るとしたらどうしますか」と尋ねられました。彼は答えました。「そのとき、私はこの畑を耕し終わっていることでしょう。」

1780年5月19日、金曜日の昼近く、突然周囲が暗くなり、暗黒日が米国北東部を覆いました。コネティカット州議会を開いていた議員たちは世の終わりの預言の成就と思い、いっせいに議場を出て家に帰ろうとしました。そのとき一人が立ち上がって言いました。「皆さん、私たちが仕事をしているところをイエス様に見ていただくではありませんか！」。議会は暗い中でろうそくを灯して続けられたのでした。私たちも一生懸命生きているところを主に見ていただきましょう。



第8課

5月25日

子、教会、竜 (黙示録12章)

● 暗唱聖句 ●

「兄弟たちは、小羊の血と / 自分たちの証しの言葉とで、 / 彼に打ち勝った。 / 彼らは、死に至るまで命を惜しかなかった。 / このゆえに、もろもろの天と、 / その中に住む者たちよ、喜べ」

(黙示録12:11、12、新共同訳)

「兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しかなかった。それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ」 (黙示録12:11、12、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月18日

黙示録12章は大いなる敵、悪魔に勝利するキリストについての章です。この章で、悪魔は天において戦いを始め、それを地上に持ち込む凶暴な竜として描かれています。この章はキリストとその教会に対するサタンへの攻撃を描いていますが、ほかにもいくつか目的を持っているように思われます。

第1に、善と悪の大争闘に登場する女、子、竜、残りの者を紹介しています。第2に、神の民の勝利を保証しています。キリストに従う人々はこの勝利にあずかります。第3に、最終的な戦いを紹介しています。それは神の残りの民に対する戦いであり、ヨハネ黙示録の後半にさらに詳しく述べられています。

黙示録12章は女が子を産む場面から始まり、次に竜が女と子を攻撃し、さらに女の子孫の残りの者たちを攻撃するところで終わります。激しい攻撃、戦いの中で聞こえてくるのは勝利の声です。それはキリストの勝利であり、「小羊の血……で、彼〔竜〕に打ち勝った」信仰者たちの勝利です(11節)。

日曜日

女と子

5月19日

問1 黙示録12:1にある女は何を象徴していますか。

女は天の輝きをまっとっており、衣は「義の太陽」の光を反映しています（マラ3:20、マタ13:43、17:2）。12の星は彼女が代表する神の民を象徴します（ダニ12:3参照）。天体の太陽と月は季節の変化を示すために用いられますが（創世1:14、15）、ここでは子の誕生による新時代の始まりを宣言しているように思われます。

これらの聖句に用いられている象徴もまたメシア的な意味を持っています。キリストは明けの明「星」（民数24:17）であり、太陽と月の永続性はダビデの王座の永続性を表します（詩72:5、89:35～37）。

問2 女から生まれた子とは誰のことでしょうか。イザ7:14、9:6、7、ガラ4:4

聖書に書かれている最初の福音は「女」から生まれた救い主を遣わすという神の約束でした（創世3:15）。キリストは女の子孫でした。彼は人間の性質を取り、人間のひとりとなり、私たちを罪から救ってくださるのでした。アダムとエバに与えられたこの救いの約束のおかげで、人類は永遠に神から切り離されずにすみました。

「神の御子は、人類の救い主になることに同意し、アダムをその創造主との新たな関係の中に置かれました。アダムはなお墮落したままでしたが、希望の扉が彼に開かれました。神の怒りはなおアダムの上にとどまっていたが、死の執行は延期され、神の怒りは抑制されました。キリストが人の救い主になるという働きを開始されたからです。……キリストは人のための避け所となられました。人は確かに犯罪者であり、神の怒りを受けるべき者ですが、キリストに対する信仰によって、備えられた避難所に逃げ込み、助かることができました。人がもし主を受け入れるなら、死に直面しようとも命があったのです」（エレン・ホワイト『現代の真理とレビュー・アンド・ヘラルド』1巻141ページ、1874年2月24日）。

創造者、神そのものであるイエスが、被造物の一部となりました。私たちを最終的に罪から救うために人となられたのです。

NOTE

NOTE

問3 黙示録 12 : 3、4 を読み、竜の特徴をいくつか挙げてください。「天の星の3分の1を地上に投げつけた」とはどういうことですか（イザ 14 : 12 ~ 15、ユダ 6 参照）。

竜の持つ特徴の一つは7つの頭と10本の角です（黙示 12 : 3）。黙示録 17 : 9、10によれば、7つの頭はこの権力が神の民を圧迫するために用いる主要な王国であり、10本の角はダニエル 7 : 24で分裂した王国、多様な政治権力の象徴として出現します。これと同じ象徴が終末時代に神の敵に加わるすべての国民に対して用いられています（黙示 17 : 12、13）。竜は明らかに地上的で、政治的な特色を帯びています。

子に対する竜の攻撃はヘロデがイエスを殺そうとしたとき（マタ 2 : 13）またイエスが試練に遭われたときに（ヘブ 4 : 15）加えられました。竜はサタンそのものです（黙示 12 : 9）。サタンは多神教ローマ帝国（竜の7つの頭の一つ）を用いたと同様に、必要ならば個人、団体、組織といった人間的手段を用いるでしょう。竜であるサタンは神に対して「昼も夜も」私たちの罪をあげて非難し、「告発する者」として描写されています（黙示 12 : 10）。

問4 神はみ子をどのような立場に最終的に導かれますか。黙示 12 : 5

子は3つの経験をします。第1に彼は約束された者として女から生まれ、人となりました。第2に彼は竜の攻撃を受けますが、竜に勝利しました。第3に彼は天にある神の王座に昇りました。彼は十字架の屈辱を受けた後に栄光を受け、王位に就きました。彼は王として全世界を支配します。「鉄の杖で……治める」（黙示 12 : 5）という表現は審判者としての働きを表しています。彼の裁きは揺らぐことのない確固とした真理に根ざしています。

私たちの経験は「子」の経験と比べてどれほど小さいものでしょうか。「十字架なくして王冠なし」という言葉を覚えてください。

火曜日

天における戦い

5月21日

黙示録12:7によれば、罪は地上で始まったのではないと教えています。罪の性質と結果はこの地上世界を含めた宇宙規模の意味があるのです。私たちはこの大争闘の中に立たされています。

ヨハネはキリストとサタンの2つの対立を述べています。

第1は、天においてルシファーが神の統治に反逆したときです（イザ14:12～14、エゼ28:12～17）。彼は「いと高き者のように」なろうとして天の王座を望みましたが（イザ14:13、14）追放され（12節、エゼ28:14、16）その後、天での戦いに完全に敗北した後で、地に投げ落とされました。

第2は主のご生涯、特にゲッセマネと十字架において最高潮に達しました。黙示録12:10に記された救いの宣言は、キリストの十字架の死によって実現しました（『各時代の希望』下巻286、287ページ参照）。キリストとサタンは改めて〔十字架において〕対面しましたが、再びキリストが勝利しました。こうして、サタンは永久に天から「追放」されました（ヨハ12:31、ルカ10:18）。

問5 天上におけるキリストの勝利に宇宙はどう反応しましたか。悪魔はいかがですか。黙示12:10～12

キリストの勝利が意味するものは、第1に、天には私たちを告発する者がいなくなったということ。第2に、私たちの勝利が小羊の血によるということ。第3に、私たちの救いが完成に近づいているということです。サタンの最終的な運命はすでに決まっています。彼は残された時間が短いを知っています（12節）。

「全天は救い主の勝利に凱歌をあげた。サタンは敗北し、彼の王国が失われたことを知った。天使たちと他世界の住民たちにとって、『すべてが終わった』という叫びは深い意味があった。大いなるあがないの働きがなしとげられたのは、われわれのためばかりでなくまた彼らのためでもあった」（『各時代の希望』下巻282ページ）。

キリストがサタンに勝利し、その勝利が私たちのものであるのに、私たちがなお罪に陥るのはなぜですか。聖書に勝利の約束が与えられていることは私たちの信仰生活の励みとなりませんか。

NOTE

NOTE

問6 竜と女とのその後の戦いをたどってください。黙示 12 : 13、15

子を産んだ女は竜から攻撃を受けますが、女が旧約と新約の神の民を代表していることを暗示しています。サタンはキリストを打ち負かすことができませんでした。そこで彼は第2の攻撃目標として地上におけるキリストの代表者である民を責めます。

問7 黙示録 12 章には 2 度預言の期間が書かれています (6、14)。この期間は何を象徴し、何が起こりましたか。(ダニエル 7 : 23 ~ 25 も読んでみましょう。同じような内容の記録や表現が用いられています)

問8 神はどのように女を助けましたか (16 節)。

ダニエルは神の民に対する迫害とその結果を強調していますが、ヨハネは神の民のための神の守りを強調しています。出エジプト記の表現がこの守りにしても用いられています。神は再び、御自分の民を「鷲の翼」に乗せて荒れ野に運ばれました(出エ 19 : 4)。教会は攻撃を受けますが、神は必要を満たしてください。ダニエルも認めているように、教会は損害をこうむりますが(ダニ 7 : 25)、結果として教会は滅びることがありません。キリストがそれをお許しにならないからです。

迫害はまた竜の口から流れ出る川のような水の象徴によって表現されていますが、神の摂理によって大地は水を飲み干し、女を助けます。エジプト軍がイスラエルの民に迫ったとき、主が右の手を伸べられると「大地は彼らを呑み込んだ」(出エ 15 : 12)とあります。神は敵が御自分の民を滅ぼすのをお許しになりません。

サタンに対する戦いがいかに激しく、時には失望に満ちたものであっても(罪と自己に対する戦いにはよくあることです) 私たちは勝利が見えない戦いをしているわけではありません。私たちの王であるキリストがすでに敵に勝利しておられるという事実は、私たちがどのような状況においても信仰をもって前進すべきことを教えているのではないのでしょうか。

木曜日

竜と残りの者たち

5月23日

黙示録12章は神の勢力への3つの攻撃が描かれています。

(1) イエスに対する竜の攻撃について(黙示12:4,7)

(2) 1260年間における教会に対する竜の攻撃について(13節)記しています。

(3) しかし12章の終わりにもう一つのグループ、つまり「その子孫の残りの者たち」(17節)が出てきます。この民、残りの者たち(17節)は、6節と14節に預言的に描かれている1260年の期間の後(1798年以降)に現れる人々です。竜はこれらの人々を攻撃します。

問9 「その子孫の残りの者たち」の第1の特徴を挙げてください。黙示12:17

黙示録において十戒は重要な役割を果たします。初めの4戒は礼拝を中心主題とする点できわめて重要な意味を持ちます。礼拝の真の対象者は竜でも獣でもなく(黙示13:4,14:9)、神だけです(14:7)。主を冒瀆することと同様(黙示13:6)、獣の像を拝むこともまた非難されています(14:9,10)。神を礼拝する理由は、神が「天と地、海と水の源を創造」されたからです(7節)。この言葉は安息日の戒めである出エジプト20:11から来ています。

問10 最後の時代に問題となる課題は神の律法のどの部分だと思いますか。出エ20:1~11

残りの者たちのもう一つの特徴は、彼らが「イエスの証し」を持つということです。黙示録19:10はその意味を明らかにしています。「イエスの証しは預言の霊なのだ。」「預言の霊」という言葉は、ヨハネの時代においては「預言の賜物」を意味しました。ヨハネによれば預言の賜物は終わりの時代の、神の残りの民のうちに生き続けます。

セブンスデー・アドベンチストが残りの民であるという確証はどこにありますか。それは誇るべきことでしょうか。重大な責任を感じますか。

NOTE

NOTE

宇宙的規模の霊的な戦いはまだ終わっていません。竜は天においてキリストに敗れ、十字架上で敗れましたが、今も告発を続けており、教会を滅ぼそうと活動しています。彼は最後の攻撃として残りの教会に向かいつつあります。神の愛の摂理は過去に教会にありました。未来にもあります。勝利は確実です。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の希望』下巻257～281ページ(カルバリー) 同282～292ページ(すべてが終わった) C・マーヴィン・マックスウェル『神の思いやり』(英文)第2巻315～324、403～407ページ

イエスとミカエル ミカエルは大天使と呼ばれています(ユダ9)。このことからミカエルが天使、また天使の長であることがわかります(黙示12:7)。天使は天の存在者の働きを示しており、彼らは「使い messenger」です。「主の御使い the Angel of the Lord」を除けば彼らは被造物です。「主の御使い」が神と同等であるという事実から(出エ3:2、4、士師6:12、14参照)多くのクリスチャンは彼を受肉以前のキリストと考えます。彼は遣わす者であると同時に、遣わされた者です。

ミカエルは戦士また士師として民を守る(ダニ10:1)イスラエルの長として描かれています(13、21節)。おそらく彼はダニエル8:10にある「天の万軍」の長であって、祭司として天の聖所で日ごとに奉仕しておられます。ヨシユア5:14では、この人物が主御自身と同一視されています(2節)。「大天使の声」をもって再臨し、命と悪の勢力に対する勝利を与えられるのはこの方です(テサ4:16)。ミカエルとキリストが同一人物であることを裏づける聖書的な根拠は十分あります。

悪魔が教会を攻撃するというとき、それは凶暴な、物理的暴力を意味するのでしょうか。霊的な欺瞞^{ぎまん}、試練もあるのでしょうか。外部からでなく内からの攻撃も考えられますか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド▲

Q 1 わがSDA教会をどう理解したらよいのでしょうか？

中世にはカトリック教会しかなく、16世紀にプロテスタント教会ができました。しかし実は各時代に、既成教会から迫害された少数派教会が存在しました。アナ・バプテスト（再浸礼派）、ワルド派、カタリ派などです。彼らは教会史的には主流に批判的であったため異端とされた経緯があります。この第3勢力は聖書のみ、政教分離、民主制、戦争反対を主張し、司祭制度、マリアや聖人崇拜、教会の俗化、宗教裁判など当時の教会の教えや習慣に否定的で、個人の信仰やキリスト者としての高い生活基準を強調する集団でした。時代に先行した教えを信じ、主張したため受け入れられませんでした。彼らこそ宗教改革の先駆者という評価があります。エレン・ホワイتمも「大争闘」の中で欧州各地において純粋な聖書の信仰を奉じていた“荒野の教会”について書いています。SDAはこうした流れを継承している教会と言えると思います。

Q 2 SDAだけが真の教会ですか？

カルバンは「見える教会、見えない教会」という考えを述べた神学者でした。彼はカトリック、メソジスト、ルター派、SDAといったキリスト教を標榜する地上の教会や組織を“見える教会”と説明し、アダム以来の純粋な信仰に生きた聖徒たち、アブラハム、ダビデ、ペトロなどをはじめ、各時代の信仰者たちを“見えない教会”に属する聖徒と考え、彼らこそ霊的信徒、神の国に属する民といたしました。この世ではだれが“見えない教会”に属しているかは明らかではありませんが、救われるのは“見えない教会”にある霊的な聖徒たちです。カトリックや他教会に“見えない教会”に属している方があり、キリスト教に触れたことのない人も数多くいるはずで、『アドベンチストの信仰』（教会の項参照）を読んでください。再臨においてSDAという“見える教会”が“見えない教会”と一つになると考えるSDA神学者や牧師もいます。

Q 3 聖書は「残りの教会 = SDA」と預言したのでしょうか？

聖書は各時代の、全世界の人々のために書かれた神の言葉であり、キリストによる救いを主題にしています。聖書はSDA教会のために書かれたのでは決してなく、SDA信者の独占とは考えられません。ただし、19世紀の再臨運動の指導者たちは預言の研究から、自分たちこそ、終末において真理を奉じる民との確信と使命感をもって再臨宣教に臨む教会を組織しました。SDAは少数派かもしれませんが、かつてキリスト教史に大事な貢献をした第3勢力と同じく、この時代のための大事な真理を担っている教会と信じ、存在することに意味があると考えてみましょう。



第9課

6月1日

海から現れた獣 (黙示録 13 : 1 ~ 3)

● 暗唱聖句 ●

「捕らわれるべき者は、捕らわれて行く。剣で殺されるべき者は、剣で殺される。ここに、聖なる者たちの忍耐と信仰が必要である」

(黙示録 13 : 10、新共同訳)

「とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある」

(黙示録 13 : 10、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月25日

黙示録 13 章は暗い光景で始まっています。竜から権威を受けた獣でスタートしているのです。竜がサタン自身であることは先週の研究で学びましたが、この獣の権力は神と神の御名と神の聖所を冒瀆し、神の民を攻撃します。この権力のことはダニエル 7 章で学びましたが、ヨハネは改めてこの力について述べています。

黙示録 13 : 1 ~ 10 は一部 12 章の繰り返しですが、新しい、重要な情報が加えられています。中世に竜によって用いられた宗教的・政治的権力が復活し、残りの民に対する攻撃において重要な役割を果たすようになるので繰り返されているわけです。竜は残りの民 神の戒めを守り、イエス・キリストの証しを持つ人々を滅ぼそうとしますが、地から現れた獣（黙示録 13 : 11）は残りの民を攻撃する第 2 の勢力です。

獣が出現し、冒瀆と迫害を行う暗い絵の中にも希望があります。神の御子とその死がこの章に啓示されているからです。竜と獣がどのような働きをしようとも、キリストは勝利を収めておられます。神は繰り返し御自身が勝利を得られたこと、そしてその勝利が私たちのためであることを知らせようとしておられます。

日曜日

海から現れた獣

5月26日

「わたしはまた、1匹の獣が海の中から上^{のぼ}って来るのを見た。これには10本の角と7つの頭^つがあった。それらの角には10の王冠があり、頭には神を冒^{ぼう}瀆^{とく}するさまざまな名が記されていた。わたしが見たこの獣は、豹^{ひょう}に似ており、足は熊の足のようで、口は獅子^しの口^{くち}のようであった」(黙示13：1、2)。

NOTE

黙示録13：1～11は、獣の描写、獣の経験、獣の働き、獣の経験と評価、神の民に対する励まし、という順序になっています。

問1 「海から上ってくる」との表現は何を意味するのでしょうか。ダニ7：2、3

黙示録13章の獣とダニエル7：2～7とを比べて共通部分を調べましょう。ヨハネが第2の獣について初めに記しているのは7つの頭と10本の角です。黙示録12：3に出てくる竜も同じ特徴を持っているので、これら2つの生き物の間には密接な関係があります。10本の角はローマ帝国の分裂の象徴であるダニエル書7章の10本の角を示しています(ダニ7：7)。

ヨハネはダニエル7章に目を向けさせることによって、この獣が黙示預言の歴史的な流れの中で出現する時期を特定しようとしています。黙示録13章ではダニエル7章の獣が逆の順序、つまり豹(ギリシア)、熊(メド・ペルシア)、獅子(バビロン)の順に現れます。ヨハネは自分の時代から過去に、つまりバビロンに戻り、それから将来に進んでいます。彼がここで描いている大いなる獣は過去の3つの獣とは異なる(ダニ7：7に出てくる恐ろしい獣)ローマ帝国です。

10本の角に言及することで預言はいっそう特定化されています。10本の角にはそれぞれ王冠があるという事実から、ローマ帝国がすでに滅亡し、その後に出てくる国家が政治的な権力を行使することを示しています。したがってこの獣の働きはローマ帝国の分裂後に起こります。このことからそれがダニエル7章の小さな角と同様、ローマ教会を表すことがわかります。

ダニエル7章と黙示録13章の関連をしっかりと把握しましょう。

NOTE

問2 竜は獣に何を与えますか。黙示 13 : 2

この聖句には即位式の光景が描かれています。竜は獣をその王国の共同支配者、また自分の目的を遂行する手先に任命していません。竜は神がキリストになさったのと同じことをしています。キリストは神から権威を受け、御父の王座にお座りになります(黙示 2 : 27、3 : 21)。竜はこれをまねていますが、今でもこの世の神になろうとしているのです(イザ 14 : 14)。

問3 黙示録 1 : 18、5 : 6、13 : 2、3 を読んでみましょう。キリストと獣とはどんな類似、相違点があるでしょうか。

黙示録 13 : 3 によれば、獣は致命的な傷を受けますが、傷はいやされ、獣は生き延びます。黙示録 17 : 8 で「以前いて今はいない……やがて来る」と言われている獣は特別な政治的、宗教的権力のことであると思われます。

問4 獣の傷が癒いよされると全地はどうしましたか。黙示 13 : 3、4

この獣の回復については「全地は驚いて」とあるように、世界に衝撃を与えます(黙示 17 : 8 参照)。この聖句はまた、獣が政治的な権力であると同時に、宗教的な権力でもあることを明らかにしています。地の住民が獣と竜を拝んでいます。理由はこの獣に並ぶ者がいないからです。この権力の特異性は獣が権威をもって自らの意思をほかの者に押し付けるところにあります。それは政治的な優位性によって人々に十戒の第 1 条を犯させます。この権力に逆らうことのできるものは誰もおらず、無敵です。

黙示録 13 章からは礼拝の問題が浮かび上がってきます。竜との戦いにおいて礼拝の問題が重要な意味を持ってきます。私たちが誰を、どのように礼拝するかということは重大なことです。私たちが善良な人間で正直に生き、隣人に親切にするだけではいけませんか。礼拝を捧げるという行為の深い意味を考察してみましょう。

火曜日

獣による冒瀆^{ぼうとく}

5月28日

NOTE

黙示録13：5は私たちの目を13：2の聖句に引き戻します。竜が海から現れた獣に自分の力と権威を授ける場面です。5～7節はこの獣がどのようにして、またどれだけの期間にわたって、その権威と力を行使するかを描いています。1260年が経過したのち(1798)「致命的な傷」(3節)が加えられました。

ダニエル7章の並行記事も重要です。ダニエルもここで1260年について(25節)小さな角が神に対して尊大な言葉を語ることに(8、11、25節)小さな角が聖者を迫害し(25節)これに打ち勝つことについて(21節)記しています。ダニエル7章と黙示録13章は同じ宗教的・政治的権力について述べています。

問5 黙示録13：5～7にある獣の特徴、性質を調べてください。

神に敵対するこの権力の働きを表す言葉は冒瀆です。まず全般的に「口を開いて神を冒瀆し」と述べ(黙示13：6)次に具体的な説明がなされます。

神の御名を冒瀆する 神の御名を冒瀆するとは、神に属する威厳、権力、権威を奪うことです。それは人間が神の働きと特権を横領するとき(マコ2：7参照)あるいは自らの行動によって神の御名を汚すときに起こります(テモ6：1)。獣は地上の住民の礼拝を受けています。これ以上の冒瀆があるでしょうか。

神の幕屋を冒瀆する ダニエル8章は同じ権力が天の聖所におけるキリストの執り成しの働きを攻撃している光景を描いています。人間が神の恵みを取り次ぎ、罪を赦す権威を持つと言われていきます。

天に住む者たちを冒瀆する 黙示録では神の民がすでに天に住む聖なる民と見なされています(黙示14：1)。そうであれば聖徒たちがみ名のために迫害されるとき、彼らに対して冒瀆が加えられていると見なされるのではないのでしょうか(7節)。

多くの人は知らずに神を冒瀆している場合がないとは言えません。神を信じる私たち自身の行動にも似通った点が見られないか考えてください。

NOTE

「地上に住む者で、天地創造の時から、屠^{ほふ}られた小羊の命の書にその名が記されていない者たちは皆、この獣を拝むであろう（黙示 13 : 8）。

聖句は獣の活動についていくつかの点を明らかにしています。

第 1 に「地上に住む者で……その名が記されていない者たちは皆」とあるように、獣は全世界的な何かを語ります。その活動は特定の地域に限られたものではありません。

第 2 に礼拝の問題が争点になります。世界は礼拝の問題をめぐって 2 つに分かれます。

第 3 に命の書に名を記されていない人たちは獣を礼拝します。命の書に名を記されている人たちは獣を礼拝しません。

問6 命の書と名前の記録についての聖句を読んでみましょう。

出エ 32 : 32 _____

ダニ 12 : 1 _____

ルカ 10 : 20 _____

フィリ 4 : 3 _____

黙示 3 : 5 _____

「耳ある者は聞け」との言葉は注意深くあれとの指示です。10 節の解釈は人によってさまざまですが、文脈からすると、獣の権力がいつかその犯した罪に対する相応の報いを受けると教えているように思われます。

黙示録 13 : 8 に「天地創造の時から、屠られた小羊の命の書」について記しています。ここには屠られた小羊と命という対照的な言葉が用いられています。小羊の死と命の書に名を記されることとの関係をどのように理解しますか。小羊の死は私たちの名が命の書に記されることとどんな関係にありますか。

木曜日

励ましの言葉

5月30日

「ここに、聖なる者たちの忍耐と信仰が必要である（黙示13:10）

問7 残りの者はなぜ忍耐と信仰という特性を持つように勧められているのでしょうか。

NOTE

「忍耐」と訳されているギリシア語は“ヒュポモネー”で、その基本的な意味は「～の下にとどまる」です。それは二つの思想を含んでいるように思われます。一つはどんな不利な状況にあっても自分の立場を貫き通すことで、外的な状況や圧迫に支配されないことです。決めた目標に向かって進み、その目標を達成するためには何事にも喜んで耐える生き方です。“ヒュポモネー”に含まれるもう一つの思想は期待することです。事実、私たちが何かの「下にとどまり」、忍耐するのは何かを期待するからです。このクリスチャンの美德を持つ人々は解放のときを待ち望んでいます。どんな苦しみも、命の危険もいつまでも続くものではないことを彼らは知っています。ですから彼らは主の再臨と最終的な救いを待望することによって何事にも耐え忍ぶことができます。

ヨハネが教えているもう一つの美德は「信仰」です。ギリシア語は“ピスティス”で、ふつうは「信仰」と訳されますが、「信仰、信頼、忠実」という意味もあります。ここでは「忠実」が最もふさわしいように思われます。ヨハネは読者にどんな状況下でも主に忠実に従うように勧めています。信仰とは私たちの生涯を全くキリストに捧げることです。その信仰が試練に遭ったときには、神と神の教えに忠誠を尽くします（ヘブ11:17）。残りの民は揺らぐことなく主に忠実でなければなりません。迫害のない今、どのように忍耐と信仰を強めることができるのでしょうか。

「教会は異端と迫害に直面し、不信や背信と戦わなければならないが、それでも神の助けによってサタンの頭を砕いている。主は鋼はがねのように真実な民、花崗岩かこうがんのように固い信仰を持った民をお持ちになるであろう。彼らは世にある神の証人、神の備えの日にあって特別で栄光に満ちた働きをする器とならねばならない」（『教会へのあかし』第4巻594、595ページ）。

NOTE

竜は残りの者への最後の戦いに準備をします。彼はかつて世界歴史の1260年の間、政治と宗教の一致という権威を用いてきましたが、同じことが再び起こるでしょう。基本的な論点は真の礼拝の対象にあります。キリストに属し、命の書にその名が記されている者は安全です。キリストの犠牲は彼らを希望と真実の中で力をもって守ってくださいます。

もっと深く学びたい方へ

『SDA 聖書注解』(英文)第7巻816～819ページ、C・マーヴィン・マックスウェル『神の思いやり』(英文)第2巻324～340ページを読みましょう。

致命的な傷 黙示録13:1～10によれば、獣に致命的な傷が加えられたのは1260年後のことです。この預言的期間は、アレクサンダ・ベルティエ元帥が教皇制を終わらせる目的で教皇を捕縛した1798年に終わりました。「ピウス6世は81歳の高齢で、しかも病気であったが、捕縛され、捕虜としてフランスに送られ、そこで死んだ(1799年8月29日)。この日、教皇庁は完全に崩壊したかに見える」(『新カトリック百科事典』第6巻191ページ)。

「フランス人はピウス6世から世俗の権力を奪った上、自由をも奪った。捕虜としての彼の死は、その後数世紀にわたって教皇制の運命を暗たんたるものとし、使徒継承が『最後の教皇ピウス』の死と共に終わるといふ預言の論議を生じさせる結果となった」(『新カトリック百科事典』第10巻965ページ)。

黙示録13章を読んで、私たちはこれらの預言のどの部分に生きていると考えられますか。自分の信仰、また教会の使命という点でどのような教訓を学びましたか。

サタンは最後の教会に厳しい戦いを挑むでしょう。私たちはどのようにして自らを守り、どこに救いがあると考えたらいいでしょうか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

カトリック教会は変わったか？

【教皇制度】カトリックの特異な一つは使徒継承の教えです。キリストはペトロを教会の代表者に任命し（マタ16:18）宣教権限を与えたとしており、現ヨハネ・パウロ2世教皇はペトロから263代目の後任者という理解をしています。今日、教皇はバチカン市国元首という政治権をもって全世界に外交官を派遣しています。使徒継承を尊重する英国聖公会、ギリシア正教も他の使徒たちの優位に立つ“教会のかしら、ペトロ”としておらず、聖職者はすべて平等と考えています。カトリック教会は時代とともに変遷しています。

【第19回トレント公会議（1545～63）】ルターらによる宗教改革後に開かれた会議で、多くの政治家、学者、宗教家らの批判、また内部からの告発を受けた聖職売買、司祭や教会に見られた低い道徳などの綱紀肅正を行いました。一方、カトリックの教えの正統性を確認し、プロテスタント教会を異端として破門しました。イエズス会が成立し、カトリックの失地回復、世界宣教へと攻勢に出たのはこの頃です。

【第20回バチカン公会議（1869～70）】18～19世紀のヨーロッパは王や皇帝たちなどの俗権が伸張し、また市民社会の間に世俗主義、自由主義などが起こって教会離れの風潮が見られました。カトリック教会は危機感をもって公会議を開催、当時台頭してきた近代主義、社会主義、科学主義、労働運動、ヒューマンイズムなどを抑圧するような保守反動的決定をしています。教会内にも異論があった教皇無謬説（教皇が教皇の座から、教師として全世界の信徒に語り、しかも信仰と道徳に限って語る教え、言葉は無謬であるとする教義）や、マリアの無原罪懐胎、被昇天の教理もこのころ宣言しています。

【第21回バチカン公会議（1962～63）】米ソの冷戦、核実験、ベトナム戦争の中でヨハネス23世教皇は平和と対話を強調し、「キリスト教会が世界に貢献すべきことは平和」と訴えて有名なバチカン会議が開かれました。これまでのような他を非難して自己の正統性を主張する姿勢を改め、「支配する教会から仕える教会」への戦術転換を決議しました。過去への反省をこめてユダヤ人への偏見と迫害を謝罪し、宗教裁判や処刑、自然科学を否定してきた歴史を認め、共産主義との協調、信教の自由尊重、そしてプロテスタントとの和解、他宗教との共存など、過去を思えば信じられないほどの歴史を逆転する大変革を遂げました。

近年確かに制度上の改変、組織、コミュニケーション、宣教姿勢などにおいては顕著な変化が見られますが、果たして教義の問題でプロテスタント主義への譲歩があるのかは極めて疑問です。特に教皇首位権については最後まで問題になるでしょう。



地から現れた獣 (黙示録 13 : 11 ~ 18)

● 暗唱聖句 ●

「また、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っており、小羊と共に14万4000人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた」 (黙示録 14 : 1、新共同訳)

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、14万4000の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた」 (黙示録 14 : 1、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

6月1日

黙示録 13 章は竜と、海から現れた獣と、地から現れた獣の間に形成される偽りの三位一体について記しています。それらは三位一体の神(父なる神、御子、聖霊)に敵対し、残りの民に対して怒りを表します。しかし神はご自分の民に敵の用いる戦略を明らかにされます。騒乱が起こったときに私たちが驚き、失望し、欺かれることのないためです。神は未来を知り、支配しておられ、有限な人間の目には望みがないように見えるときにも慰めを与えてくれます。

黙示録 13 : 11 ~ 18 にはアメリカ合衆国を先頭に現在進行中の将来の出来事が描かれていますが、推測は避けましょう。すべてのことがわかっているかのように終末の諸事件に関して筋書きを書くべきではありません。間違えると失望や虚偽に陥ることになります。神は重要な争点に関して十分な光を与えておられます。世界が敵となるときも神は守り、愛してくださいます。

注: 14万4000人が字義通りなのか、象徴なのかは気になりますが、エレン・ホワイトは「誰が14万4000なのかを議論することは神のみ旨ではありません」と書き、『SDA聖書注解』は「彼らが誰であるかよりもどんな人たちかを知ることが重要」と説いています。

日曜日

地から現れた獣

6月2日

「わたしはまた、もう1匹の獣が地中から上^{のぼ}って来るのを見た。この獣は、小羊の角に似た2本の角^{つの}があって、竜のようにものを言っていた」（黙示13：11）。

NOTE

第2の獣は次のような特徴を持っています。

新しい獣は最初の獣が傷を負った後に現れます。傷を負ったのが1798年ですから、この頃に出現する権力のことです。

地から現れた獣は海から現れた獣のいやしにかかわっています。両者は治る間と治った後、同時に存在します。

地から現れた獣は神によって出現させられたものです。「地中から上って来る」（黙示13：11）という象徴の意味するところは重要です。このような特徴を持つ黙示的な獣は、海からではなく地から現れる獣だけです。セブンスデー・アドベンチストは一般に「地」を人口のまばらな地域と解釈します（箴21：19、エレ2：6参照）。しかし「地中から上って来る」という表現を全体的に理解するとき、その象徴が意味ある解釈につながります。この獣は植物と同じように地中から出現します。これは創造の記事にのみ見られる思想です。「神は言われた。『地は、それぞれの生き物を産み出せ』……そのようになった」（創世1：24）。獣が地中から出現するというこの象徴は、それが神の力によって出現したことを示しています。

「小羊の角に似た2本の角」（黙示13：11）という表現はこの獣の初期の外観を表すもので、穏やかな政治形態を強調しています。後にそれは竜のようにものを言うようになります。

このような条件に見合う国家は預言期間の1260年のあとの1798年頃に出現し、神に祝福され、初めは小羊のような穏やかな政治形態を持ち、やがて強制力を持つ権威を行使するように変質してゆくことがわかります。こうした特徴から考えれば、アメリカ合衆国はある領域においては確かに小羊のようで、しかも竜のように語る国家です。

第2の獣は小羊のようですが、竜のようにものを言います。聖書に出てくる小羊は礼拝を受ける神の子ですが、決して礼拝を強制されません。しかし竜は全く礼拝を受ける権利がないにもかかわらず、礼拝を強制します。

NOTE

問1 海からの獣と地の中からの獣との関係を調べてみましょう。黙示録 13 : 12

「竜のようにものを言っていた (11節) という言葉は黙示録13:12に説明されています。それは後続の聖句に詳しく描かれた内容を要約しています。第2の獣は全世界に第1の獣を礼拝させる(政治的、軍事的、経済的)力を持っています。明らかにこの第2の獣は大いなる力と権威を持っています。

問2 『各時代の犬争闘』を読むと、エレン・ホワイトは今から100年以上前の1888年に第2の獣をアメリカ合衆国と述べています。当時のアメリカは現代のように世界を動かすほどの力も影響力も持たない国でした。過去、特にここ数十年の間の何がこの国を預言成就の悲劇的役割を演じる特異な立場に導いたと思いますか。

第1の獣は第2の獣に権力を与え、第2の獣は第1の獣の代表者として働きます。プロテスタント主義のアメリカは「先の獣が持っていたすべての権力」を行使します。それは神と神の幕屋を冒瀆し、神の民を迫害する権力です(黙示13:5~7)。この預言は「明らかに、それ〔プロテスタントのアメリカ〕が、龍やひょうに似た獣によって象徴される国々が表わした狭量と迫害の精神を持つようになるということを予告している(『各時代の犬争闘』下巻161ページ)。

地中から上って来る獣は全世界に第1の獣を拝ませる役割を果たします。背信したプロテスタント諸教会は全世界において第1の獣の傷をいやすために働き、すべての人に第1の獣の権威を認めさせ、それを拝ませます。ヨハネは世界的な規模の背信について描いています。

他教派の多くのクリスチャンも、終わりの時に迫害が来ると予想していますが、迫害が教会の中から来ると信じている人はほとんどいません。彼らは迫害が教会以外の、反キリスト教勢力から来ると信じています。しかし歴史的に見れば、迫害がしばしば教会の中から起こっているのは事実です。

火曜日

心霊術と獣 奇跡

6月4日

問3 地中からの獣が行う奇蹟の目的は何ですか。黙示13:14、15

竜と2つの獣は奇蹟を行って全世界を支配しようとします。それは全世界を神と神の民に敵対する悪霊の力によってなされるものです（黙示16：13、14）。その奇蹟の最高潮は天から火を降らせるといことです。

問4 黙示録13：13にある「天から地上へ火を降らせた」とは何を意味しますか。

黙示録において火は神の裁き（黙示8：5、14：10）また神の臨在の象徴です。聖霊は「7つのともし火」（黙示4：5）によって表され、キリストご自身は「燃え盛る炎」のような「目」（1：14）と「火の柱のよう」な足（10：1）を持っておられます。ヨハネの言葉はカルメル山におけるエリヤとバアルの預言者の話を思い起こさせます。真の神は天から火を降らせてご自身を啓示されました（列王上18：20～39）。バアルでなく、主だけがおできになる奇蹟でした。ところが黙示録では竜が（第2の獣を用いて）多くの無知な人々をだますために同じことを行います。

新約聖書にも2度、天からの火の記事があります。最初は五旬祭のときで、火のかたちをした聖霊が天から弟子たちに降りました（使徒2：1～4）。黙示録13：13は世界的な規模で偽りのリバイバルをもたらす偽りの聖霊降下を表しているのかもしれませんが、2番目はテサロニケ1：7、8にあります。「主イエスが力強い天使たちを率いて天から来られるとき……燃え盛る火の中を来られます。天からの火はキリスト再臨の象徴です。黙示録は悪霊がプロテスタント主義のアメリカの助けを借りてキリスト再臨をまねると言っているのでしょうか（『各時代の争闘』下巻398、399ページ参照）。

アドベンチストの青年フィリップの友人アンソニーはニュー・エイジ・グループの会員で、心霊術やオカルトを信じ込んでいます。彼は「自分の信仰には“奇蹟”という確証がある」と言います。奇蹟を見て何でも信じてしまう彼をどのように説得したらいいでしょうか。

NOTE

NOTE

問5 第2の獣は第1の獣への忠誠の証しとして世界に何を要求しますか。黙示13:14、15

「獣の像」(黙示13:15)がどのようなかたちで具体的に現されるにせよ、はっきりしている点があります。この像をめぐる争点は礼拝にあるということです。私たちがだれを礼拝するか この単純な問いかけに世界は明確に2つの陣営に分かれるでしょう。

問6 ダニエル3章を読むと、バビロンの王は自分の造った金の像を礼拝するように強制しました。黙示録13章にも獣がある強制力をもって命令を下すという類似点があります。それぞれの重要点は十戒のどの部分に関わるのでしょうか。

古代世界において像はその人の代表者と見なされていました。第2の獣は「第1の獣のために働く」(黙示13:14、新国際訳)とあります。これは第2の獣が第1の獣の「像」として働くということです。礼拝という行為は人間以上の存在に尊崇をささげ、献身し、祈り求め、服従することを示すものです。宗教的な信念から来世さえもゆだねるほどの全身、全霊をかけた依存を意味します。

獣の像に息を吹き込むという象徴は創世記2:7から来ています。創世記2:7によると、神は土の塵で形を造った像に命の息を吹き入れて生けるものとし、ご自分の代表者として働くようにされました。神の力によって出現した小羊のような獣は、神だけに与えられた権利、つまり命を与え、命を取る権利を要求します。像または獣を拝むのを拒むことは、その教えと命令に従わないことを意味します。それは反逆であって死に値することです。

「人間は何かを礼拝することなしには生きていられない」とよく言われます。たしかにある種の真理を語っているように思いますが、あなたの礼拝の対象は誰、または何でしょうか。まことの神ですか。自分自身ですか。仕事や地位ですか。家族ですか。富や権力ですか。自分が何を対象にして礼拝しているかはどのようにしてわかるのでしょうか。

木曜日

獣の刻印と数字

6月6日

獣の刻印 この刻印は獣の名と同じで、獣に忠実な人々を表します。聖書に出てくる名前はしばしば個人の品性を表しますが、この刻印を受ける人たちは獣と同じ精神を表します。それは神の律法に対する態度に表されます（ダニ7：25）。反対に神の刻印を受ける人たちは戒めを守り、神に忠実です（黙示12：17、14：12）。獣は神の律法に反し、安息日を日曜日に変えることによって、律法を変更しようとします。獣の権威が表されるのはこの行為においてです。獣に従う人々はその印として日曜日を守ります。日曜日を守ることは獣の名と獣が意味するものに忠実であることの明白な印です。

NOTE

問7 「今、日曜礼拝をしていることが獣の刻印を受けているというわけではない」と教会が言う根拠は何でしょうか。なぜこの点を明確に理解すべきなのでしょう。

獣の数字 獣の刻印、名、数字は密接な関係にあります（黙示13：17）。666の意味についてはさまざまな説明がなされてきましたが、私たちは注意深くありたいと思います。聖書はこの数字が名前の文字に含まれる数値の合計であると教えていません。ある人たちは666が神から離れた人間の象徴であると言います。人間は第6日に創造されたのでこの数字は神の安息（第7日）を持たない人間の象徴と考えることもできます。人間は神から完全に独立することを求め（墮落の原因）、今でもキリストにある安息に入ろうとしません。

最近、多くの学者が666の数字に関してさまざまなことを言っています。ある人はアメリカ元大統領ロナルド・レーガンの名前の数を合計すると666と言います。ある人たちは数年前エルサレム市内の全部のバスに666の数字があったと言います。こうした解釈は真理を理解する上で何の役にも立たない無益な推測です。たとえ今はすべてが明らかでなくても、終わりの時には何が重要な問題で、だれが中心的な役割を果たすのかは聖書に十分な情報が与えられています。666の正確な意味についても同じです。

666という数字の意味するところを理解できなくても、黙示録13章の獣の特性を知ることは将来のための大事な備えです。

NOTE

黙示録 13 : 11 ~ 18 はプロテスタンティズムを含む宗教全体が中世のローマ教会の慣習をまねて獣の刻印についての法律強制を行う役割を描写しています。それは非キリスト教的な権威の出現であり、その力は全世界に及ぶでしょう。しかし残りの民はシオンの山において小羊とともに危機の間も守られます。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の大大争闘』下巻 151 ~ 172 ページ (預言に現れたアメリカ合衆国)、C・マーヴィン・マックスウェル『神の思いやり』(英文) 第 2 巻 330 ~ 349、377 ~ 399、413 ~ 416 ページを読みましょう。

今週の研究を閉じるにあたって、次の点に留意しましょう。

(1) ヴィカリウス・フィリアイ・ディアイ (Vicarius Filii Dei 神の子の代理者) 宗教改革以降、この教皇の称号が 666 の数字と考えられてきました。SDA もこの見解を伝統的に保持して講演会、伝道集会、聖書研究で語り、そのように書いてきましたが、最近はこの点に注意を払うようになってきました。この解釈にはいくつか問題があります。第 1 に、この称号が正式なものかどうか不明です。第 2 に、黙示録 13 章にはこの数字が名前の文字の持つ数値と関係があるかどうか明示されていません。「数字は人間を指している」(18 節) という言葉は「数字は〔人間たち〕を指している」と訳すこともできます。それは神から離れた人間たちを意味します。第 3 に、文字の数値を数えるにしてもどの言語を用いるかが問題です。聖句は言語を明示していないので特定の言語を採用することは独断的になります。現時点では 6 を 3 回用いることによる極度の反逆、神からの完全な離脱の象徴と取るのが最善のように思われます。この象徴の真の意味は時が啓示してくれるでしょう。

(2) 注意事項 黙示録 13 章の内容を人々に伝える場合にはまず福音を優先すべきです。それから時を賢明に判断し、預言の研究を紹介しましょう。個人や他教派を攻撃するのではなく、人々を信仰と行為の規準である聖書に導くようにしたいものです。へりくだった精神、すべての人の友となる心をもって語りましょう。私たちの言葉、行い、思いにはキリストの精神があふれているのでしょうか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

アメリカ建国の由来と推移

ヨーロッパの国家、教会の権威主義からの自由を求めて建国されたのがアメリカ合衆国です。当時の政治家や思想家たちは合衆国憲法を作成するにあたり、宗教と政治の分離を大きな柱と考えました。ですからNo Pope, No King(教皇なし、国王なし)を理想社会と考えたのでした。このプロテスタント主義を原則に建国した事情があるのです。カトリック信徒たちも同じ根拠でメリーランド州周辺に定住し、それぞれの良心に基づいて共存を考えたのでした。以降アメリカは国際紛争問題に関してはつねに不干渉主義を貫き、第1次世界大戦でも中立の立場を取っていましたが、アメリカ商船がドイツ海軍に攻撃されたことから戦争に積極的に加わり、以降アメリカが参戦すると戦争はいつも勝利に終わりました。こうした図式からやがてアメリカは世界を動かす超大国へと立場を変えました。

今日、アメリカには“キリスト教徒連合”なる団体があり、キリスト教原理主義的信念をもって政治面でも活動しています。進化論でなく創造論を学校で教えよ、公立学校での神への祈り復活、同性愛・不倫・不道徳・ポルノ反対、健全な家庭の強調、妊娠中絶反対、愛国心などを主張し、アメリカに与えられた神からの使命として正義を守る強いアメリカを目指す動きが見えます。こうした信念から中絶を行う医院を襲撃して医師を殺害した元牧師も現れました。また同性愛を認めたとの理由で「ディズニー関連の映画、絵本、施設への出入り禁止」を教会として指示する文書を発表しました。さらに白人優位、強いアメリカを目指し、かつて清教徒たちが「約束の地アメリカ」としたと同じ神権政治を求めるような危険な動きがキリスト教会内に見られます。狂気に導かれると思ってもみない方向に動き、恐ろしい集団を形成する危険が人間にはあることを覚えて、冷静で真の常識を備えた信仰を求めてゆきたいものです。

S D A教会は政治と宗教の分離を尊重します。また同意しないとしても他者の権利と主張を認める立場をとっています。宗教や信仰の自由は言論、出版、結社、表現の自由とともに神が人に与えた基本的人権に属し、アメリカ独立宣言、フランス革命以降の近代国家の特徴で、自分と異なる意見や教えを権力で圧迫したり、多数で抑圧するのは神から与えられた人間としての尊厳否定につながります。アドベンチストは他教派、他宗教、また非キリスト教徒に対しても神の創造された存在としての尊厳を信じます。



第11課

6月15日

三天使のメッセージ (黙示録 14 : 1 ~ 12)

● 暗唱聖句 ●

「大声で言った、『神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい。』」
(黙示録 14 : 7、新共同訳)

「大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め。』」
(黙示録 14 : 7、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

6月8日

黙示録 13 章は神の民が経済制裁と死刑宣告に直面するところで終わっています。彼らが獣の像を拝まないからです。敵が神の民を皆殺しにしようとするのは、自分自身をこの世の正当な支配者としてすべての人に認めさせるためです。自分に敬意を払わない人々がいる限り、この目的は徹底することもなく、満足することはないでしょう。サタンは昔も今も、この世の神になることを意図しています。

竜は世界的な運動・宣伝によって全世界のすべての人に自分を拝ませようとし、しかし彼には競争相手があります。それは礼拝に関して彼に対抗するメッセージ、すなわち黙示録 14 章の三天使のメッセージです。

黙示録は本質的に異なる 2 つの世界的な運動が互いに並行して展開する様子を描いています。まさにそれは善と悪との大争闘で、サタンは偽りのメッセージによって人々に自分を拝ませようとする一方、神は救いをもたらす最後のメッセージを世界に伝えられます。それは神の民に、バビロンを出て、創造主を礼拝せよとの信仰を呼びかけるメッセージです。ここで学ぶ形で大争闘は展開しますが、背後にある真の戦いはキリストとサタンの大争闘です。

日曜日 全世界的使命 シオンとハルマゲドン

6月9日

神の計画と竜の計画との間には興味深い関係があります。

NOTE

	神の計画	竜の計画
1 手段	3人の天使 (黙示14:6、8、9)	汚れた3つの霊 (黙示16:13)
2 方法	福音の宣布(14:6) あらゆる国民、種族、 言葉の違う民、民族に 告げ知らせる(14:6)	奇跡を行う(16:14)、 全世界の王たちのところへ出て行く(16:14)
3 目的	悪の勢力を暴露する (14:8~10)、残りの 民をシオンの山に集める (14:1~3)	世界をだます (16:14、13:13)、 王たちをハルマゲドン に集める(16:14)
4 結果	勝利(14:4)	敗北(16:19)

ハルマゲドンは文字通りの場所でなく、再臨前のキリストとサタンの最後の対決の象徴と考えられます。

ハルマゲドンについては、アドベンチストの中にも2つの解釈があります。“ハル”が「山」を意味するヘブライ語であることはどちらも認めますが、第1の見解によれば“マゲドン”はイスラエルにあるメギドの町を意味し、メギド山、つまりエリヤがバアルの預言者と対決し、神が火の中でご自身を啓示されたカルメル山を指すと考えています。そこでハルマゲドンは主と竜との最後の対決を表し、主は再びまことの、唯一の神としてご自身を啓示されるという考えです。

第2の見解によれば“ハルマゲドン”はイザヤ14:14を指します。ルシファーは神の御座があった「集会の山」(13節、口語訳、ヘブライ語で“ハル・モエド”)に自分の座を据えようとしていました。したがってハルマゲドンはこの世において永遠に神の地位を占めようとするサタンの最後の^{たくら}みを意味します。どちらの見解も黙示録のメッセージと合致します。

聖書をたどってみますと、墮落以降、サタンはつねに偽物を用いて人々をだましてきました。彼は今日、どんな偽物で私たちをだまそうとしていると思いますか。守られる手段はあるでしょうか。

NOTE

古代世界や聖書において印章はいろいろな機能を持っています。印章と言っても円筒印章や印形つき指輪、粘土や臘ろうに押される印影とがあります。聖書においては印章は所有(エフェ1:13)、神聖不可侵(マタ27:66)、信頼性(列王上21:8)の象徴でした。押印された物は保存され、保護されました。

新約時代には印章は「しるし」と同意語に用いられました。パウロは旧約の「割礼の印」を「義とされた証し」、つまりアブラハムが信仰によって義とされた証拠しんことしています(ロマ4:11)。旧約聖書においては安息日もまた印とされました。

問1 次の聖句は安息日のどの点を強調していますか。

出エ31:13 _____

出エ31:17 _____

申命5:15 _____

黙示録では神の律法に従うことが神への服従と忠誠のしるしとされています(黙示12:17、14:12)。残りの民の額に押された刻印(黙示7:3)は神および小羊の御名と同等です。ここに2つの思想が表されています。

額に名を記されるとは、彼らが神のものであって、神の保護と守りのもとにあることを意味します(黙示7:3)。

彼らの生き方が神の品性と神聖さを表していることを意味します(黙示14:5)。聖書において名はその人の品性を表します。

終わりの時代の神のしもべたちはその生活において神に心から献身し、特に聖化のしるしである安息日をきよく守ります。したがって神の刻印は神に対する無条件の服従を意味します。それは神の律法、特に安息日の戒めに従うことによって表されます。

エレン・ホワイトは、神は終わりの日に罪から清められた人に刻印が押されるが、その印は人に見えなくても天使にはわかり、神の刻印を受けている民を過ぎ越します。印されると聖徒は「知的、霊的に、真理に落ち着かせ、以後動かされることはない」と述べています(『SDA聖書注解』4巻1161ページ)。

火曜日

第一天使のメッセージ

6月11日

NOTE

第一天使のメッセージの構成は、まず初めにメッセージ、次にそれが与えられた聴衆、最後に招きという順序です。

1. メッセージ 宣べ伝えられているのは「永遠の福音」です。永遠の福音と言われているのはそれが不変で、永遠に有効で、真実だからです。「福音」とはキリストが受肉、生涯、死、復活、大祭司としての働きを通して成し遂げてくださった救いの御業のことです。福音は裁き(ロマ2:16)と再臨(テサ1:5、9、10)をも含みません。救いはキリストに対する信仰、従順にいたる信仰によってのみ実現します。

2. 聴衆 福音が全世界に宣べ伝えられるのは罪が全世界的なものだからです。福音はすべての人種・民族に伝えられます。人はすべて罪人だからです。

3. 招き それは三重の命令によって表されています。「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。……礼拝しなさい」。神の偉大さ(詩96:4)、正義(黙示15:3、4)、救い(イザ45:21、22)を目にするとき、人は信仰と服従をもって神にひれ伏します。神を畏れるとは神の戒めを守ることです。

この招きは神の栄光をたたえるようにも告げていますが、それは神を最も愛すべきお方、最も重要なお方と認めることです。神に並ぶお方はいません。神をたたえることによって私たちは悪の勢力ではなく、神との同盟、平和にあることを宣言するのです。神をたたえるとは何かを神に捧げるのではなく、私たちの人生において神を第一とすることです。

この招きはまた大争闘の中心である礼拝を扱っています。竜ではなく、神だけが礼拝を受けるお方です。神だけが創造者です。使命は私たちを天地創造のしるしである安息日に導きます。それは偶像崇拝や進化論と全く相容れないものです。

第一天使のメッセージが「永遠の福音」(黙示14:6)をもって始まっていることに留意してください。キリストの救いというこの特別な真理をもって始まっています。キリストに対する信仰によってのみ救われるという偉大な真理を離れてこのメッセージは意味を持つでしょうか。

NOTE

問2 バビロンと諸国の関係を述べてください。黙示 14 : 8

旧約聖書でバビロンは神と神の民の最大の敵でした(エレ 50 : 24、28、29)。黙示録でもバビロンは敵として描かれています。都市としてのバビロンは政治的な力を強調し、淫婦としてのバビロン(黙示 17 章)は宗教的な力を強調しています。バビロンの起源は人間の尊大さと神への反逆と関係があり(創世 11 : 1 ~ 9) バビロンという名は「混乱」を意味します。

問3 聖書はバビロンを他にどんな存在として描いていますか。黙示 17 : 1 ~ 4

バビロンは女で象徴されています。聖書においては、純潔な女は神の民を象徴し(黙示 12 : 1)、不道德な女は神に不忠実な人々を象徴します(出エ 34 : 15、イザ 1 : 21、エレ 2 : 20、エゼ 16 : 41)。

靈的姦淫^{かんいん}は2つの形をとって現れます。第1に、それは真理を否定し、偶像礼拝を行い、真理と虚偽を混ぜ合わせます(エレ 2 : 23 ~ 25、ホセ 1 ~ 3 章)。黙示録において女はキリストの血を表すかどうかではなく、自分自身のぶどう酒を諸国民に飲ませています。第2に、地上の諸国民との間に政治的な同盟が結ばれます(エゼ 16 : 26 ~ 29)。バビロンが世俗的な権力を握り、真理を捨てたとき、教会は淫婦をもって象徴されるにふさわしい姿になりました。

パウロが預言したキリスト教会の背信は使徒時代のすぐ後に始まり、中世においてさらに発展し、次いで背信プロテスタントの支持を得て全世界的に広がります。宗教的、政治的勢力としてのこの背教は、キリスト再臨の前に世界を支配しようとし、バビロンは黙示録 13 : 15 ~ 17 に描かれた危機において頂点に達します。やがて獣とその像は世界的同盟によって宗教と政治の力を一つに結合^{けっごう}します。バビロンの最終的な崩壊は将来のことです(『各時代の斗争闘』下巻 92、93 ページ参照)。

「バビロン人」であるためには「バビロン」に生きていなければなりません。「エルサレム」に生きている人でも自分のうちに「バビロン」を持つことがありますか。

木曜日

第三天使のメッセージ

6月13日

NOTE

第三天使のメッセージは獣と獣の像の完全な敗北を宣言しています。ここには何回か獣と獣の像と獣の刻印のことが出てきますが、これは第三天使のメッセージが獣のいやされる間、またその後には宣べ伝えられることを暗示しています。

問4 警告に注意を払わない人たちの運命はどうなりますか。

(1) 警告に従わない人々は神の怒りのぶどう酒を飲む 神の怒りの杯は神が強制的にぶどう酒を飲ませ、裁きを与えることを表しています。このぶどう酒が混ぜ物のないものであることは裁きの厳しさの象徴です。それは最後の7つの災いに加えて(黙示16章) 悪人の最終的な滅びを意味しています。残りの民は神の怒りの杯を飲む必要はありません。キリストが彼らのためにそれを飲んでくださったからです(マル14:36)。

(2) 彼らは永遠の刑罰を受ける 「その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上り」(黙示14:11)という表現は、彼らが完全に滅ぼされることを意味しています。同じ表現がエドムについても用いられていますが(イザ34:9、10) エドムはもう燃えていません。火が永遠であるのはその結果が永遠という意味で、火によって滅ぼされたものは永遠に滅ぼされたままです。

(3) 彼らには平安がない 獣と獣の像を拝む人たちには平安がありません。平安はキリストを通して神の民に与えられる神の賜物です(マタ11:28~30)。悪人は神の民に約束された永遠の平安にあずかることができません。

問5 黙示録14:12に残りの者はどのように定義されていますか。

イエスに対する信仰はイエスの教えとイエスを信じる信仰の両方を意味します。前者はイエスの真理に従うことを強調し、後者はイエスによって義とされることを強調します。

救われたいと望みながらもまだその確信のない人に対して、どのような助言をしたらよいですか。

NOTE

神は全世界に対して愛と忠誠をもって神に帰るように召しておられます。三天使のメッセージで神は竜の最終的破滅をお示しになりました。遅くならないうちにバビロンから残りの者を召し出すのが神の目的です。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の争闘』下巻75～93ページ(真理の拒否とその結果)を読んでください。

今週の研究を閉じるにあたって、次の点に留意してください。

(1) 安息日が争点 「黙示録13、14章において7回、『拝む』という語が聖でない三位一体に関して用いられている。『竜を拝んだ』『獣を拝む』『獣の像を拝む』。これらの章には、まことの神を拝むようにとの招きは1回しか出てこない。もし真の礼拝と偽りの礼拝が終末における争点であるとすれば、この聖句(黙示14:7)はこの部分、また黙示録全体の中心的な聖句である。黙示録が最終的に、まことの神を礼拝するように人々に呼びかけるのは、第4の戒め、つまり安息日の戒めに関連してである。したがって黙示録の著者は特別な意味で、安息日が最後の危機において争点になると理解していた」(ジョン・ポーリー『聖書は終末について何と述べているか』126ページ、1994年、強調付加)。

(2) バビロンとユーフラテス 「ユーフラテスに関する天使の解釈(『人々、群衆、国民、国語』)によれば、バビロンの川〔ユーフラテス〕は中東を意味しない。神が文字通りの川や、イスラエルの敵の『洪水(大群)』を^あらされた場合には、いつも敵に対する摂理的な裁きを意味していた。将来の第6の災いにおいてバビロンの大河が^あられる(黙示16:12)というのも例外ではないだろう。すべての国の政治指導者と群衆が突然、宗教的バビロンに対する神の判決を認め、一致して支持を取り下げるとき、裁きが始まる」(ハンス・K・ラロンデル「ハルマゲドン」『黙示録論集』第2巻386、387ページ、1992年)。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド▲

黙示録の著者であるヨハネは何を意識して三天使のメッセージを書いたのでしょうか。自身はドミティアヌス皇帝の迫害の中、パトモスの孤島で主から後の日に関する幻を受けました。「天と地と水のみなもとを造られた神を拝め」はローマの皇帝礼拝への批判であり、「バビロンより出よ」はローマ異教主義からの離脱へのメッセージであり、「獣を拝むな」は多神教ローマ否定の叫びであったでしょう。初代教会は獣で代表されるサタンの手先となって教会を迫害したローマ政府の手中にありました。当時の信仰者にとって三天使のメッセージはローマからの決別の訴えでした。

19世紀の再臨信徒は1844年という再臨前審判開始と同時に叫ばれた「裁きの時は来た」との警告の使命と理解しました。それは特に1859年に出版されたダーウインの『種の起源』で代表される進化説と対照的な創造主礼拝への訴えを含むメッセージであったでしょう。バビロンから出ることを叫んだ第二天使のメッセージは米国の場合、サタンに追従するプロテスタントからの離脱を求めるメッセージと解釈しました。そして第三天使のメッセージは第7日安息日への回帰を求める最終使命と了解しました。

現代の私たちにとって第三天使のメッセージはどのように聞こえますか。善と悪との大争闘の視野に立ってみるとき、世界は二つの勢力が激しい最後の戦いを挑んでいます。勝利は決定的ですが、悪魔はキリストに勝てない事実の前で、人をだまし、多くの民を滅びに誘う努力をしています。キリストにつくか、悪魔につくかを意味する戦いの中で、黙示録はキリストによる救いを声高く伝えていきます。「この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った。『神を畏れ、その栄光をたたえなさい』」（黙示14：6、7）

最後のメッセージは福音であり、よきおとずれです。セブンスデー・アドベンチスト教会が伝えるべき最後のメッセージはキリスト再臨の喜びです。真の神を礼拝すること、罪の世から脱出すること、神の子としての刻印である信仰義認を身に負うことこそ、私どもに語りかける三天使のメッセージにほかなりません。



祝福に満ちた希望

● 暗唱聖句 ●

「以上すべてを証しする方が、言われる。『^{しか}り、わたしはすぐに来る。』アメン、主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように」
(黙示録 22 : 20、21、新共同訳)

「これらのことをあかしするかたが仰せになる、『^{しか}り、わたしはすぐに来る。』アメン、主イエスよ、きたりませ。主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように」
(黙示録 22 : 20、21、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

6月15日

古代ギリシアの劇作家はしばしば「デウス・エクス・マキナ」(機械から来た神)と呼ばれる手法を用いました。劇の中の主役が解決不可能に見える難題に直面したとき、“機械から抜け出てきた神”が空から舞台に降りてきて事態を收拾するというものです。この考えは最高、究極の希望であるイエスの再臨を思い起こさせます。

これまで学んできた黙示預言は神の支配がこの地上に最終的に実現する時を指し示しています。主の再臨は平和、正義、愛が確立され、苦痛、恐怖、疑惑をもたらした悪が最終的かつ完全に滅ぼされることを確証するものです。各時代の信仰者に旅を続ける力を与え、また「祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れ」(テト 2 : 13)を待ち続けさせたのはこの輝かしい希望でした。この希望は、今日も約束された再臨を待ち望む私たちに同じ強い力を与えてくれます。

黙示録の研究は最終的に神が全宇宙を支配し、すべては神のご栄光のために、という大事な主題を私どもに現すものです。罪に落ちた者に救いがあり、神のご性質である愛と義が明らかにされ、もはや矛盾も戦いもない、神の平和が再現されます。

日曜日

再臨されるお方

6月16日

「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た2人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる』」(使徒1:10、11)。

イエスご自身が再臨されます。ほかのだれでもありません。弟子たちは昇天されるイエスの姿を見て、悲しみと喜びに満たされました。彼らを慰めるために2人の天使が遣わされ、昇天される主と再臨される王が同一人物であることを強調しています。「あなたがたから離れて天に上げられた〔ほかならぬ〕イエスは〔昇天されたイエスご自身〕天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる〔イエスご自身が再臨される〕」(使徒1:11)。

問1 パウロの確信を読んでください。主ご自身が戻ってこられることにはどのような重要性があるでしょうか。 テサ4:16

主が天から来られるということはこの出来事が私たちの支配の及ばないところにあることを意味します。主が天から来られるという事実はまた、キリストが現在、人間の目から隠されていることを意味します。私たちは今、目に見えるものによってではなく、信仰によって歩んでいます(コリ5:7)。私たちは今、「わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます」(コリ1:7)。

問2 黙示録1:7、マタイ24:30には、再臨が霊的、抽象的、秘密で、選民のみが知るといふ思想がありますか。

“パルーシア”というギリシア語は、主が栄光のうちに来臨または臨在されることを意味する新約聖書の用語です。それは“実在する”あるいは“到着した”ことを示す語句です(コリ16:17、コリ7:6)。救い主イエスが到着されるのです(テサ2:19、4:15～17)。

キリスト再臨の約束のない信仰は意味を持ちますか。

NOTE

NOTE

「また、祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように教えています」(テト2:13)。

問3 キリスト再臨に必ず用いられている単語を挙げてください。マル8:38、テト2:13

「栄光」という言葉は神の輝かしい、目に見える臨在を表します(ルカ2:9、使徒7:55、テモ6:16)。それは神の品性、神秘に満ちた神の人格も表します(ヨハ1:14)。キリストは父なる神の栄光、すなわち彼が初めから持っておられた栄光のうちに再臨されます(ヨハ17:5)。キリストは受肉によってその栄光を隠し、「人間」となることによってご自分を無にされました(フィリ2:5~9)。キリストが再臨される時、その神性の栄光はその人性を通して大いなる力をもって輝き出ます。私たちは神の顕現、すなわち「わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れ〔顕現〕」(テト2:13)を見ます。

問4 出エジプト19:10、11には神が現れた状況が書かれていますが、再臨の時とどう違うでしょうか。

世界は果てから果てまでキリストの臨在の輝きと栄光で満たされるので、すべての人の目がキリストを見ます。イエスとのこの出会いから逃れることのできる人はだれもいません。イエスの再臨は地球規模のもので、なぜなら、罪もまた全世界に広がっているからです。罪に陥ったのは地球の一部の地域だけではなく、地球全体です。イエスの輝かしい臨在から逃れることのできる場所はこの世界にはありません。イエスは力強い天使の群れと美しい天の音楽に包まれて来られます。彼は密かに、あるいは一人きりで来られるのではなく、天使たちを伴って来られます。それは荘厳な光と音の競演です(テサ4:16、マタ24:31)。

悪人たちはキリストの再臨の日、山や岩に向かって自分たちを覆ってくれと叫びます。そのとき私も逃げようとするでしょうか。

火曜日

神の民のための力強い臨在

6月18日

問5 マタイ 24 : 30、 テサロニケ 4 : 15 ~ 17 の共通点は何でしょう。どのような光景が想像できますか。

初臨においてイエスは赤子、無力な幼子として来られました。彼は地上の王に命をねらわれて両親の手でほかの場所に移されなければなりません。しかし今、彼は栄光と力に満ち、王の王として来られます。再臨は積極的です。イエスは、「御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために」来られます(ヘブ9:28)。

問6 キリスト初臨を再臨と比べてみましょう。

キリストの再臨は世がこれまでに経験したことの無い出来事です。たとえば次のようなことが起こります。

キリストはその犠牲によって、死をつかさどる力を持つサタンを滅ぼされました(ヘブ2:14)。彼は死に対するご自分の勝利を確かなものとするために来られます。キリストの声は非常に強力で、人間の声ができないことを成し遂げます。キリストにあって死んだ人たちの耳にも聞こえ、彼らを死の眠りから覚まします。死そのものが「勝利にのみ込まれ」ます(コリ15:54 テサ4:16 参照)。

キリストは再臨において人を滅ぼすことなく、人の罪深い性質を滅ぼされます。これはキリストの十字架以外ではできないことです。私たちはキリストの犠牲の力のゆえに墮落的な罪の力から解放されて、栄光に満ちた者に造り変えられます。これは瞬間的に、「たちまち、一瞬のうちに」起こるのです(コリ15:52)。

キリストが再臨されると、悪の勢力は一致して神の民を滅ぼそうとしますが、キリストは力を持って来られます。「この者どもは小羊と戦うが、小羊は主の主、王の王だから、彼らに打ち勝つ。小羊と共にいる者、召された者、選ばれた者、忠実な者たちもまた、勝利を収める」(黙示17:14)。イエスとともにくる天使たちは「天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」(マタ24:31)。あがなわれた人たちにとってキリストの臨在は永遠です。人は敵から解放され、永遠にわたってキリストと共に住みます(ヨハ14:3、1テサ4:17)。

NOTE

NOTE

問7 悪人の運命はどうなりますか。 テサ2:8

悪は一時的ではない現象で、始まりがあり終わりがあります。自滅することはありません。悪を終わらせるためには神の介入が必要です。神のおられるところでは悪の勢力は力を失い、消滅します。黙示録19:11～21は再臨の光景を描いていますが、キリストはそこでご自分に逆らう勢力と戦う戦士として描かれています。

神の民が天使によって集められる一方で、獣、偽預言者、地上の王たち、そして彼らに加担したすべての民は白馬の騎手の臨在によって滅ぼされます(黙示19:11～21)。「王の肉、千人隊長の肉、権力者の肉……また、馬とそれに乗る者の肉、あらゆる……者たちの肉」が野にさらされます(18節 21節参照)。

竜の最後は黙示録20:1～3、7～10に書かれています。次の出来事が再臨、千年の間とその後に起こります。

(1) 義人は生き返り、栄化され、キリストと共に住みます。これが第1の復活です(黙示20:4、5)。

(2) サタンは生きたまま、混沌としたこの地球につながれます。惑わす対象はどこにもおらず、だれひとりいません(黙示20:3)。

(3) 千年の間、義人はキリストの王国の裁判官として働きます(コリ6:2～6)。

(4) 1000年の後、生き返らされた悪人はサタンと共に、天から下ってきた聖なる都を攻撃します(黙示20:7、8)。

(5) この戦いは実際には行われません。なぜならそのときサタンとその仲間たちは神と対面し、裁かれ、永遠の滅びを宣告されるからです(黙示20:9～15)。この執行審判は悪人が記録の書にしたがって裁かれた後で行われます。

サディーは再臨を信じているものの、一つの不安はキリストを公然と拒んだまま死んだ両親のことです。悪人が地獄において永遠に苦しまないことは彼女もわかっていますが、両親が黙示録20章に描かれた運命に定められていると考えると悲しくなります。あなたはどのように彼女にアドバイスしますか。

木曜日

エデンの回復

6月20日

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった」(黙示21:1)

NOTE

問8 黙示録21:1～7にある千年期後のいのちを考えてみましょう。「神が涙をぬぐってくださる」とのみ言葉をどのように理解されますか。

矛盾、無秩序、混乱しか知らない私たちに完全な調和に満ちた世界というものが想像できるでしょうか。新天地における経験は明らかに私たちの想像を超えたもので満ちていることでしょうか。

聖書に描写されている新しい世界は、私たちがこの罪に満ちた世界で経験したことのないものです。新しい世界には死も悲しみも、嘆きも労苦もありません(黙示21:4)。離別も疎外も、あるいはデンマークの哲学者セーレン・キェルケゴールの言う「不安」もありません。これらはみな古い罪の世界に属するものです。罪はもはや存在しません。

問9 未来の栄光に加えてローマ8:18～22はどのような希望が待っていると書かれていますか。

イザヤ書35章も読んでください。神の臨在が死と病の世界にもたらす結果を描写しています。神の臨在は自然界を造り変え、その本来の豊かさに戻し、人間の性質を罪の醜悪さから解放します。生命と喜びが満ちあふれます。しかしこの喜びでさえ私たちがこの世で経験する喜びとは性質が異なります。私たちがこの世で経験する喜びは、長い悲しみの中の一瞬の喜びにすぎません。預言者イザヤが描いているのは永遠に続く無限の喜びです。死、嘆き、悲しみ、苦しみは私たちの想像を絶する豊かな経験によってもたらされる喜びに取って代わります。新しい世界とは、時間、質、内容のすべてが古いものの改良、改善を超えた新次元の神の世界でありましょう。

イギリスの作家ヘンリー・フィールディングは、「人間は地獄を手に入れる半分の苦しみに天国に入ることができる」と言いました。あなたはどう思いますか。

NOTE

昇天されたキリストは再臨のキリストです。その民を救うために彼は神性の衣である栄光をまとしてこられます。民は復活し、栄化されます。千年期後に悪は神の裁きに直面します。このとき宇宙的な闘争は最後を迎えます。

もっと深く学びたい方へ

『各時代の犬争闘』下巻412～434ページ(神の民の救出)、435～445ページ(千年期と地上の荒廃)、446～467ページ(犬争闘の終結)を読んでください。

今週の研究を終えるにあたって、次の点を心にとめてください。

(1) 将来の世界について考える 「この地上の美しさに心が魅せられるとき、罪にも死にもむしばまれないきたるべき世界のことを考えてみましょう。すると、そこには、もはやのろいのかげはみられません。なお、救われた者の家庭を考えてみましょう。それは、どんなにすばらしい想像もとうてい描き出すことができないほどのりっぱなものであることをおぼえましょう」(『キリストへの道』117ページ)。

(2) 永遠にわたって学ぶ 「そこでは、不死の者たちが、創造力の驚異、^{あがな}贖いの愛の奥義を、永遠に尽きない喜びをもって研究する。人を誘惑して神を忘れさせるような、残酷で欺瞞的^{きまん}な敵はもういない。すべての才能が発達し、すべての能力が増大する。知識を獲得するのに、頭脳を疲れさせたり、精力を使いきってしまったりするようなことはない。そこではどんな大きな企画も実行され、どんな遠大な抱負も達成され、どんな大望も実現される。そしてそれでもなお、越えるべき新しい高いところ、感嘆すべき新しい驚異、理解すべき新しい真理、頭と心と体の能力を呼び起こす新たな対象が現われてくる。……

永遠の年月が経過するにつれて、神とキリストについてますます豊かですますます輝かしい啓示がもたらされる。知識が進歩していくように、愛と尊敬と幸福も増していく。人々は神について学べば学ぶほど、ますます神のご品性に感嘆するようになる」(『各時代の犬争闘』下巻466、467ページ)。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド△

再臨はキリスト教会の大事な教え。S D A教会はあまり使徒信条(日本基督教団出版局『讃美歌』566番)を唱えませんが、他のキリスト教会では礼拝においてしばしば使徒信条を公同の教会の信仰告白として読みます。これは歴史的キリスト教会が自分たちの信じることを述べた信仰の表明であり、大事な教理の基本です。天地創造の神から始まって、最後の部分は「主は……かしこ(天)より来りて生ける者と死ねる者とを^{さば}審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の^{ゆる}赦し、^{からだ}身体のよみがえり、^{とこしえ}永遠の^{いのち}生命を信ず。アーメン」とあります。再臨はすべての教会が共有する、共通の聖書基本教理であり、究極の希望の実現です。

カトリック教会も再臨信仰を大切にしていますが、次のように大きく違う部分があります。“要理”によると、人は死ぬと私裁判を受けて、罪のない者は天国の幸いに入り、キリストや聖徒たちとの交わりを楽しみます。心の汚れたままの者は煉獄^{れんごく}において償い^{つぐな}を果たす必要があります。大罪を犯した者はキリストのいない地獄で特別な苦しみを受けます。この世はキリスト再臨によって終わり、教会の使命はそのとき完成し、神の国が出現します。その日、キリストのもとにあった靈魂は復活した肉体に合わされます。復活した義人はキリストの復活体に似た光栄をもって天国の永遠の幸福に入り、悪人は地獄の永遠の苦しみに入ります。これが公裁判であり、終わりなき死といえます。

再臨は初代教会信仰者たちの「エルピス」。政府の迫害を逃れて多くのクリスチャンたちはローマ市郊外にある地下墓所に逃れ、そこでひそかに礼拝を続けました。ローマ人は墓場を汚れた場所と考えて近づこうとしないことから安全な場所と考えられていたのです。そこにはクリスチャンたちも葬られていましたが、壁のあちこちにギリシャ語で「エルピス」という字が刻まれていました。「希望」という意味です。初代教会の信仰者たちはキリストの再臨に望みを置いて迫害に耐えたのでした。「マラナタ」という字も多く書かれていました。クリスチャンたちを逆境の中で支えてきた思いはよみがえりの希望であり、愛する主と家族、友人との再会でありました。



黙示預言の完成

● 暗唱聖句 ●

「キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。……従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり」
(エフェソ2:17、19、新共同訳)

「それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。……そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである」(エペソ2:17、19、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

6月22日

キリストの再臨はクリスチャンとしての私たちの望みがかなう時です。私たちが信じてきたのはすべてこの日のためです。それはイエスを信じ、イエスのあがないを受け入れてきた私たちの希望が実現する時です。再臨がなければクリスチャンであることにどんな意味があるのでしょうか。私たちの信仰に意味と目的と方向を与えるのはキリスト再臨の希望です。

キリストは今も私たちに再臨に備えるように招いておられ、この招きを受け入れる方法も備えられています。聖霊はイエスの招きを受け入れる力を与えてくださいます。私たちがすべきことは、この招きを受け入れ、キリストの和解と義認の働きに従うことによって神と調和した生き方をすることです。そのとき私たちは恵みにおいて成長し、絶えず救い主と交わるようになります。ひたむきに信仰生活を送り、あがないの主に会う備えをするようになります。イエスは私たちが天において永遠に生きる備えをするのを助けてくださいます。

日曜日

招き

6月23日

「御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます」(テサ2:12)。

「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」(ロマ3:25)。

栄光の救い主に会う備えをせよという招きは十字架において神から直接来ます(テサ2:12、ロマ3:25)。福音は天国への招きであるばかりでなく、天国に入る唯一の手段なのです。

福音は神から与えられますが、さまざまな方法で私たちに伝えられます。神は友人や親戚、またラジオ・テレビ番組や雑誌などを通して招きをお与えになります。神はこの聖書研究ガイドを用いても私たちが神に会う備えをし、救いの招きを受け入れるように招いておられます。

問1 この招きに聖霊はどのような役割を持っていますか。ヨハ16:8

人が神の招きを受け入れるのは人間的な推論や生まれながら持っている心の傾向によってではありません。むしろ人間の心は神の招きを拒否します。そこで神は超自然的な力によって、人が神の招きを受け入れるように促されます。それが聖霊です。聖霊は「世の誤りを明らかに」して下さいます(ヨハ16:8)。「誤りを明らかにする」と訳されているギリシア語の“エレンコー”は「責める、罰する、正す」を意味します。聖霊は良心を目覚めさせ、私たちのうちに罪悪感、孤立感、神からの断絶感、疎外感を呼び起こされます。次に聖霊は私たちを十字架のもとに導き、十字架のうちに解答を見いだすように招いて下さいます。

聖霊は私たちの真の状態を悟らせ、それに対処する方法も教えてください。聖霊は誤りを明らかにされますが、決して強制されません。受け入れるか拒むかは個人にゆだねられています。

人間が救いに逆らう傾向を持つのはなぜですか。喜んで永遠の命を受け入れようとしないのはなぜですか。

NOTE

NOTE

「すると、ペトロは彼らに言った。『悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗バプテスマ礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます』(使徒2:38)

人間の本質的な問題は人間の心と関係があります。それは皮膚にできないぼを除去するような単なる外面的な問題とは異なりです。ある人は霊的な問題に無関心で、キリストを自分に無関係と考えます。ある人は公然と神に逆らい、キリストの存在を否定し、キリストに従う人々を軽蔑します。人はみな内面の変化を必要とします。この変化が「悔い改め」です。ギリシア語の動詞“メタノエオー”は、「自分の心を変える」という意味です。再臨への備えは反逆が服従に変わることから始まります。悔い改めは神からの賜物ですが、それを拒むこともできるのです。

問2 罪を示されたダビデの反応はどうでしたか。サム下12:1～6、13

悔い改めの賜物を受け入れる人は自分の罪を告白します。罪を告白することは罪を捨てることであり、自分の罪がキリストに苦しみをもたらしたことを認めることです。私たちの告白に対する神の答えは赦しであって、それはすでにキリストの死によって与えられています。私たちが信仰と悔い改めをもってキリストのもとに来るとき、キリストはすべての罪を赦してくださいます(使徒2:38)。

問3 主は人にどのような招きをくださいましたか。マタ11:28

回心は悔い改めと告白の積極的な面も持っています。クリスチャンは何かを拒否すると同時に、何かを積極的に支持します。私たちは罪を拒否しますが、キリストを受け入れます。回心は神に立ち帰ることで、方向転換をして創造主・あがない主に帰ることで、

悔い改めは信仰生活の初めにだけ見られるものですか。それとも信者が絶えず心に持つべき霊的な状態ですか。

火曜日

神との一致

6月25日

「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」(コリ5:18、19)。

罪の問題を平和的に解決することが神の望みでした。神は私たちに和解を与えてくださいます。私たちが滅びる理由はないと神は言われます。神は私たちに罪の責任を負わせないで私たちの罪を赦してくださるのです。十字架がその証明です。神の赦しを受け入れる瞬間、それは私たちの生活において現実のものとなります。そのとき初めて再臨を迎える用意ができます。

NOTE

問4 神の赦しについての聖句を読みましょう。イザ53:5、マコ10:45、 コリ5:21

神には一つの問題がありました。“いかにして罪人を滅ぼすことなく罪を滅ぼすか”でした。十字架において神はこの問題を解決されました。「罪と何のかわかりもない方[イエス]を、神はわたしたちのために罪となさいました」(コリ5:21)。

神は私たちの罪をキリストに負わせ、キリストは私たちの代わりに私たちの罪の身代金となって死なれました(イザ53:5、6、マコ10:45)。つまり神はイエス・キリストにおいて私たちの罪を罰せられたのです。それゆえに神はキリストを信じる人たちを義なる者、潔白な者、罪責のない者と宣言してくださるのです(ロマ3:23、24)。私たちが自分自身のゆえにではなく、イエスのゆえに希望と確信をもって再臨を迎えることができるのはそのためです。キリストの再臨を待ち望む人たちは唯一の救いの手段としてキリストを信じます。

問5 十字架でキリストがしてくださったことについての聖句を読みましょう。ガラ2:20、 ペト2:24

主の恵みについて話し合ってみましょう。

NOTE

問6 次の聖句を読んでください。 コリ1:2、フィリ3:12、ペト3:18

信仰によって義とされるとき、私たちは聖霊の賜物を受け(ガラ3:2)、ここから聖化が始まります。この聖化の過程を理解するにあたって次の点に留意する必要があります。

聖化あるいは清めはクリスチャンの生活状態を表し、私たちが信じたときにスタートします(Ⅰコリ1:2,6:11)。キリストを受け入れたとき、私たちはキリストのために聖別され、罪から清められたのです(エフェ5:25,26)。

聖化はまた霊的・道徳的成長の過程でもあります(ヘブ12:14)。私たちは絶えず霊的に成長してゆきます(フィリ3:12)。

聖化の大きな2つの目的は、(1)私たちのうちに神の姿を回復すること(コロ3:9,10)、(2)私たちの生き方を通して人々に神の愛、慈しみ、知恵を伝えることです(エフェ3:10、Ⅰヨハ4:7~13)。

聖化は、私たちが神の御心を受け入れることを要求します。それは決して功績となりません。聖化は神の恵みに成長することであって、それ以外の何ものでもありません(ヘブ13:20,21、ペト3:18)。

問7 恵みに成長する段階での私たちの罪についてどのような勧告がありますか。 ヨハ1:9

クリスチャンとは聖霊によって導かれ、もはや罪の奴隷でない人のことです(ロマ8:9)。聖霊によって私たちは自分のうちにある罪に勝利することができます(ガラ5:16)。神の律法に従うことは、救い主なるキリスト(ヨハ14:15)と隣人(ロマ13:8~10)に対して私たちの愛を表すことです。服従は神に受け入れられるために律法に従うことではなく、信仰によって義とされた人たちを通して、神ご自身が自らの愛を表されることです。その過程で倒れるようなことがあれば、悔い改めて罪を告白しなさいと聖書は教えています。聖化とは絶えず悔い改めと告白の精神をもって全的に神に従うことです。

回心においてすでに再臨に対する備えができているのに、なおも恵みに成長する必要があると言われているのはなぜでしょう。

木曜日

神と共に歩む

6月27日

問8 エノクの生き方は当時の人たちとどういう点で違っていたのでしょうか。創世5:18～24

生きたままキリストの再臨を迎える“14万4000人”をめぐって、教会の中に多くの議論があります。その多くは無用な議論、あるいは根拠のない推測に過ぎません。

神を愛し、清めを求める人たちにとって重要なのは、日ごとに神と共に歩むことです。生きたままで栄光の雲に乗って来られるキリストを迎えようが、あるいは死よりよみがえり、主にお会いしようが、重要なことはエノクのように主と共に歩むことです。

問9 「神とともに歩く」とはどんな経験なのでしょうか。考えたことがありますか。神とともに歩いているながら時につまづくということがあるのでしょうか。

聖書はいくつかの方法で「神」という語と「歩む」という語とを関連づけています。その1つが「主の前を歩む」です（例、創世24:40）。この表現はご自分の民のための神の摂理的な保護を表しています。あたかも小さな子どもがひとりりで歩くのを優しく見守る父親のようです。父親の目の前を子どもが歩いているので、危険なときにはいつでも助けることができます。

2番目の表現は「主の後を歩む」です（例、申命13:4）。昔、人々は神々の像を担ぎ、その後に行列を作って歩く習わしがありました。神々の後を歩くことが礼拝行為と見なされていたのです。イスラエル人は主の後を歩くように求められていました。

3番目の「神と共に歩む」という表現は親しい交わりを表しています。神がそれぞれ個人の生活の中心に置かれています。この表現は市場、通り、学校、教会、リクリエーションの場、家庭、職場などでも、神が人と共におられることを暗示します。人生は旅であり、私たちは巡礼者です。キリストは私たちの道連れ、同行者なのです。

神の民はキリストとの強いきずなで結ばれ、たとえ途中でつまづくことがあっても、エノクのように日ごとに神と共に歩みます。

NOTE

NOTE

キリスト再臨の日、主にある備えは私たちのために死なれた救い主に全生涯をお捧げすることを含みます。そうした信仰から神と人々に愛と感謝をあらわすように人生が変えられてゆきます。日ごとに主と歩むとき、神の愛をあらわすものとして神がお用いくださる度合いが深まってゆくでしょう。

もっと深く学びたい方へ

『キリストへの道』22～44ページ(悔い改め)、45～52ページ(告白)、53～61ページ(献身)、62～72ページ(信仰)を読みましょう。

今週の研究を終えるにあたって、次の点に留意してください。

キリストとの交わり「祈りと神のみ言葉の研究と神のたえざる臨在を信ずる信仰により、最も弱い人間も、生けるキリストと共に生きることができ、キリストはその手の中に彼らをささえ、決して離されない」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』157ページ)。

「毎朝、神におのれをささげ、これを最初の務として、次のように祈りましょう。『主よ、しもべを全くあなたのものとしてお受け入れください。私のすべての計画をあなたのみ前におきます。どうか、しもべをきょうもご用のためにお用いください。どうか、私と共にいましたもうて、すべてのことをあなたにあってなさせてください』と。これは毎日のことです。毎朝、その日一日、神に献身して、すべての計画を彼にお任せし、摂理のままに実行するなり、中止するなりするのです。こうして、日ごとに生涯を神のみ手にゆだねるとき、次第にあなたの生涯がキリストの生涯に似てくるのであります」(『キリストへの道』93、94ページ)。

黙示録3:14～22を読んでください。豊かさや貧しさ、熱い冷たいなどの対語が出てきますが、この教会へのメッセージは何を中心としているのでしょうか。信仰義認が中心テーマといわれますが、自分にではなく、キリストに救いの根拠があることを読み取ることができますか。

▽ミ/ニ/ガ/イ/ド▲

【罪】 クリソストムは4世紀のコンスタンチノーブル大司教でした。東ローマ皇帝の不興をかった彼は「信仰を捨てないなら牢屋に入れる」と脅されました。彼は「毎日忙しいので牢屋に入れば瞑想ができます」と答えました。皇帝は次に「それなら首を切って殺す」と脅しました。「天国に行けるとはなんとというしあわせ」との返事です。皇帝はあきれて「彼はいったい何を恐れ、怖がっているのか」と使いの者に尋ねさせました。使いは戻って報告しました。「クリソストムは罪を犯すことが一番恐ろしいと言っております」。

罪とは悪いことをしてしまった、すべきことをしなかったというようなこと以上を意味します。罪とは神の律法や刑法に書かれている条項に違反したのではなく、十戒を与えた神ご自身の人格、心、み旨、ご意志を傷つけ、その愛を信じないことです。私たちの愛する父や母、あるいは夫、または妻への不信、裏切り、反逆と同じです。

罪の結果が死であり、その実体は神との離反でした。罪は神と私たちを隔て、離反させ、み顔から遠ざけさせました。キリストがゲッセマネで「この杯を取り去らせてください」と3度も祈り、十字架で「わが神、わが神、何ゆえ私を見捨てられるのですか」と絶望的に叫ばれたのも罪がもたらす神との断絶の苦痛そのものをあらわしています。

【愛】 神の国が回復する日、恐るべき罪はすべて救い主の恵みによって処理され、もはや聖書や祈りという間接的な交わりでなく、私たちは神と直接顔を合わせてあいまみえる特権、喜びを受けるのです。互いに愛し合う男女が時々デートをするだけで、また手紙で交わるだけで満足することはありません。2人はいつか結婚し、一緒に住みたい、家庭をつくりたいと思うのは当然で、キリストを愛する信仰者も天国での永遠の愛を自然に祈り求めるでありましょう。罪は離しますが、愛はいつまでも結びつけます。天国はそういう場所です。1人で天国を楽しむことなど考えられません。聖徒たちは愛の雰囲気の中で愛し合う感動を経験するでしょう。エレン・ホワイトの天国への動機です。

「天国はよい所である。わたしはそこへ行って、わたしのために生命をお与えになった愛するイエスを仰ぎみて、彼の栄光のお姿に変えられることを熱望する。ああ、来たるべき輝かしい世界の栄光を表現する言葉がないものだろうか」（『初代文集』101ページ）。

霊の賜物発見キット ネットワーク

価格 22,000円(税別)
期間限定で19,800円(6月末日)まで
(福音社発行)

セット内容

ネットワーク参加者ガイド
ネットワーク講師ガイド
ネットワーク実施ガイド
ネットワークコンサルタントガイド
OHPマスター
ビデオ2巻



新発売

こんな人たちが教会をいっぱいにしたくありませんか？

- ・自分の霊の賜物を知っていて、これを活用している人。
- ・自分に対する神様のご計画と目的を知っている人。
- ・奉仕をすることに大きな喜びと情熱を持っている人。
- ・霊に満たされて成長している人。
- ・奉仕へのかかわりが、ますます増えている人。

クリスチャンが、神様から授けられた自分本来の姿を理解し、所属する教会で有意義な奉仕の場を見いだせるようにするプログラム。それが「ネットワーク」です。

やさしい聖書入門シリーズ

- 1 GRACE (グレイス)
- 2 JOY (ジョイ)
- 3 PEACE (ピース)
- 4 LOVE (ラブ)

B 5 判 108 ページ
価 格 500 円 (税込み)
(福音社発行)

全巻完成



「もっと気軽に聖書研究がしたい」。そんな声に応えるテキストができました。

SDA 教会の教理、信仰生活の基本が学べます。クリスチャンになったばかりの人、聖書研究、個人での学びなどいろいろな場面で用いてください。

クリスチャン生活のためのノート
ぶどうのえだ

A 5 判 80 ページ (1 期分)
価 格 210 円 (税込み)
(福音社発行)

聖書研究ガイドのお供に。聖書研究のノートに。日記に。祈りのノートに。礼拝ノートに。

1 つで何役もできるノートです。あなたなりの使い方を見つけてください。



* ご注文は A B C まで *

2002年度 日没表

札 仙 東 名 大 広 福 鹿 沖
 幌 台 京 古屋 阪 島 岡 児 縄

4 / 5	6 : 04	6 : 03	6 : 05	6 : 16	6 : 21	6 : 33	6 : 41	6 : 39	6 : 48
	12	6 : 12	6 : 09	6 : 11	6 : 22	6 : 27	6 : 39	6 : 47	6 : 51
	19	6 : 21	6 : 15	6 : 16	6 : 27	6 : 32	6 : 44	6 : 52	6 : 54
	26	6 : 29	6 : 22	6 : 23	6 : 33	6 : 38	6 : 50	6 : 57	6 : 58
5 / 3	6 : 36	6 : 29	6 : 28	6 : 39	6 : 44	6 : 56	7 : 02	6 : 58	7 : 01
	10	6 : 45	6 : 35	6 : 33	6 : 44	6 : 49	7 : 01	7 : 07	7 : 05
	17	6 : 52	6 : 41	6 : 40	6 : 50	6 : 55	7 : 06	7 : 13	7 : 09
	24	6 : 59	6 : 47	6 : 45	6 : 55	7 : 00	7 : 11	7 : 18	7 : 13
	31	7 : 05	6 : 53	6 : 50	7 : 00	7 : 05	7 : 16	7 : 22	7 : 16
6 / 7	7 : 11	6 : 57	6 : 54	7 : 04	7 : 09	7 : 20	7 : 26	7 : 20	7 : 20
	14	7 : 15	7 : 01	6 : 58	7 : 08	7 : 12	7 : 23	7 : 29	7 : 22
	21	7 : 17	7 : 03	7 : 00	7 : 10	7 : 14	7 : 25	7 : 31	7 : 24
	28	7 : 18	7 : 04	7 : 01	7 : 11	7 : 15	7 : 27	7 : 33	7 : 26

2002年第3期研究予告

総題 「列王記と歴代誌 反逆と改革」

第1課 多難な出発

日 「わたしが王になる」(列王上1:5)

月 赦された罪(列王上1:11)

火 赦された罪の報酬(ガラ6:7)

水 暴露された陰謀(列王上1:11~27)

木 くじかれた陰謀(列王上1:28~53)

(著者) ジム・ザクリソン

北アジア太平洋支部

